42557
教科書文庫
4
815
51-1908
20000
67131

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak

日本語教授法

全

5a
815
明41

資料室

明治四十一年一十月三日
文部省檢定濟
師範學校國語科用書

日本語法提要

小山左文二著

東京
松邑三松堂

広島大学
教
67131
図書

韻文二
七七七五調
七五七五調 八四調連自十九ページ

5a
815
明61

◎夏目漱石、作文教科書 五冊 ひらがなで
作文教科書 高橋達雄

緒言

一本書は、師範學校の本科、豫科、教員講習科などに於ける日本語法の教科書、參考書、並に小學校教員檢定試驗に應ずる人たちの參考書などに充てるために編纂したものである。

一本書は、現今一般に世に認められて居る定論に基づいて日本語法の原則を解き明かすやうにとつとめた。

從つて自分一己の臆說や妄斷は一切これを避けた。

一本書は、又現今行はれて居る國定教科書の語法と精密に一致させた。そして小學校實地教授者の適切なる參考書になるやうにとつとめた。

一本書は、又文法との聯絡に深く意を用ひて、その用語な

ども成るべく一般文法の用語に從ふた。そして徒らに讀者に惑を起させないやうにとつとめた。

一本書は、又簡明直截を旨として、一度讀めばすぐに讀者に分かるやうにとつとめた。從つて煩瑣に亘る事柄や、あまり必要でない語法などは、一切これを省いた。

一本書は、又拙著日本文法提要と密接なる連絡を保たせた。それゆゑ、本書を繙かれる諸君は、文法提要をも併せ繙いて、互に比較對照しながら研究されたい。

明治四十年八月　著者識す

日本語法提要目次

第一篇　語

第一章　總說……一
第一節　音……一
第二節　語……二
第三節　言語……二
第二章　名詞……三
第一節　名詞の意義……三
第二節　名詞の種類……三
第三章　代名詞……五
第一節　代名詞の意義……五
第二節　代名詞の種類……五
第四章　動詞……一三

第一節　動詞の意義……一三
第二節　動詞の活用……一四
第三節　動詞の段……二五
一、四段活用……二五
二、か行三段活用……二八
三、さ行三段活用……二九
四、上一段活用……三〇
五、下一段活用……三二
第四節　動詞の自他……三四
第五節　動詞の音便……三七
第五章　形容詞……四一
第一節　形容詞の意義……四一
第二節　形容詞の活用……四一
第三節　形容詞の段……四三

第六章　助動詞……四七
第一節　助動詞の意義……四七
第二節　助動詞の種類活用及び動詞との續き方……四七
一　時の助動詞……四八
二、打消の助動詞……五一
三、推量の助動詞……五四
四、受身の助動詞……五六
五、可能の助動詞……五九
六、使役の助動詞……六一
七、尊敬の助動詞……六四
八、指定の助動詞……六六
九、希望の助動詞……七〇
第三節　助動詞と助動詞の續き方……七四

第七章　關係詞……七七
第一節　關係詞の意義……七七
第二節　關係詞の種類及び用法……七八
一、體言に附く關係詞……七八
二、種種の語に附く關係詞……八五
三、用言に附く關係詞……九三
第八章　副詞……一〇三
第一節　副詞の意義……一〇三
第二節　副詞の用法……一〇四
第九章　接續詞……一〇八
第一節　接續詞の意義……一〇八
第二節　接續詞の種類及び用法……一〇八
第十章　感動詞……一一三
第一節　感動詞の意義……一一三

第二節　感動詞の種類用法……一一四
第十一章　語の構成……一一六
第一節　疊語法……一一六
第二節　熟語法……一一八
第三節　接頭語法……一二二
第四節　接尾語法……一二三
第十二章　品詞の解剖……一二四
第二篇　文
第一章　文の成分……一二六
一、主語　說明語……一二六
二、客語……一二七
三、補足語……一二七
四、修飾語……一二八
第二章　成分の排列……一三二

第三章　成分の省略……一三四
第四章　節……一三七
第一節　獨立節……一三七
第二節　名詞節……一三八
第三節　形容節……一三八
第四節　副詞節……一三九
第五節　說明語節……一四〇
第五章　文の種類……一四一
第一節　單文……一四一
第二節　複文……一四二
第三節　重文……一四三

日本語法提要目次終

日本語法提要

第一篇　語

第一章　總說

第一節　音

音

は‖　な‖
う‖　ぐ‖　ひ‖　す‖

右のはなうぐひすは、いづれも肺臟から出る空氣が、口內の諸機關に觸れて發する聲である。かやうな聲を指して音といふ。

第二節　語

はな　とり

右のはな、とりは、いづれも、音が集まって出來たもので、それぞれ特別の意味をあらはしてゐる。これらを指して語又は單語といふ。

語
單語

第三節　句　文節

文
文章

さくら　の　はな。　きれい　な　とり。

右はいづれも、語が集まって、やや込み入った意味を表はして居る。かやうなものを句といふ。

はな　が　さく。　とり　が　とぶ。

右はいづれも、語が集まって、一つの完全な意味を表はして居る。かやうなものを文又は文章といふ。

けさ、　うぐひす　の　なく　聲　を　聞いた。

右のうぐひすのなくは、一つの完全な意味をあらはして居るけれども、文の一部分たるに過ぎぬ。かやうなものを節といふ。

句、節又は文を組み立てる語の品類には九つの種類がある。今順にこれを述べよう。

第二章　名詞

名詞

第一節　名詞の意義

富士山　は、　日本　の　名山　で　ある。

耳　は　二つ、　口　は　一つ。

右の富士山、日本、名山、耳、口は、事物の名をいふ語で、二つ、一つは、數量をいふ語である。かやうな語を名詞といふ。

第二節　名詞の種類

名詞を別けて、**固有名詞**、**普通名詞**の二つとする。**固有名詞**とは、特別な事物の名として用ひる名詞である。前例の富士山、日本をはじめ、大山元帥、日本海海戰、源氏物語、靖國神社など、皆これに屬する。

普通名詞とは、同種類の一切の事物にあてはまる名詞である。前例の名山、耳、口をはじめ、國、人、書物、戰爭、神社など、皆これに屬する。

右の外、名詞の一種に數量を表はすものがある。これを**數詞**といふ。前例の二つ、一つなど廣く數を表はすものを始め、順序の數を表はす第一、第二など、或事物の數を表はす三羽（鳥の數）、五隻（軍艦の數）など、皆これに屬する。

次の文の中の名詞を類別せよ。

固有名詞　普通名詞　數詞

練習

1、父母の恩は、山よりも高く、海よりも深い。
2、西郷、木戸、大久保を維新の三傑といふ。
3、我が家は、これから三つめの小路を左へ折れて、三町ばかりいった處にある。

第三章　代名詞

第一節　代名詞の意義

私は、あなたの說を信ずる。
おまへ、それをここに持って來い。
あっちこっちをたづねまはる。

右の私、あなた、おまへ、それ、ここ、あっち、こっち等は、名詞に代へて用ひる詞である。よってこれを**代名詞**といふ。

第二節　代名詞の種類

代名詞は、これを**人代名詞**と**指示代名詞**とに大別する。

人代名詞

人代名詞とは、專ら人の名に代へて用ひる詞である。前例の私、あなた、おまへをはじめ、あのかた、どなたなど、皆これに屬する。

人代名詞の中で、わたくし、わたし、わし、おれ、僕などは、自分の名に代へて用ひる語であるから、**自稱**といひ、あなた、君、おまへなどは、話しかける人即ち對手（アヒテ）の名に代へて用ひる語であるから、**對稱**といふ。これ、このかた、それ、そのかた、あれ、あのかたなどは、自分と對手との外の人、即ち話の中に引く人の名に代へて用ひる語であるから、**他稱**といひ、どなた、だれ、どれなどは、不定の人や、知らぬ人の名に代へて用ひる語であるから、**不定稱**といふ。

自稱

對稱

他稱

不定稱

（注意）君を對稱に、僕を自稱に用ひるのは、名詞を代名詞に轉用したのである。此の類は外にも多い。

複數の人代名詞

○われわれ、私ども、おれなど、君たち、おまへら、あの人がたなどいへば、指される人が二人以上あることを示す。これらを**複數の人代名詞**といふ。

○他稱の人代名詞の中で、このかた、これ、こいつなどは、自分に近い人を指すから、之を**近稱**といひ、そのかた、それ、そいつなどは、稍自分と離れた人を指すから、これを**中稱**といひ、あのかた、あれ、あいつなどは、更に自分と離れた人を指すから、これを**遠稱**といふ。

人代名詞は、同じ稱でも、身分の高下や關係の親疎などによって、嚴格につかひわけねばならぬ。今そのあらましを次に述べよう。

自稱　わたくしは目上又は同輩に對していふ語で、わたしは同輩又は目下などに對していふ語、僕はただ同輩に對していふ語、わし、おれは目下に對していふ語であ

尊稱
平稱
卑稱

る。而して目上に對していふ語を**尊稱**といひ、同輩に對していふ語を**平稱**といひ、目下に對していふ語を**卑稱**といふ。

對稱　あなたは目上又は同輩に對していふ語（尊稱又は平稱）で、おまへは目下に對していふ語（卑稱）である。

右の外、尊稱の語に陛下、殿下、閣下、御前（ゴゼン）などいふがある。又對手を輕しめ罵る語に、うぬ、きさま、おのれなどいふがある。

他稱　このかた、そのかた、あのかたなどは目上の人を指していふ語（尊稱）で、このひと、そのひと、あのひとなどは同輩又は目下の人を指していふ語（平稱又は卑稱）、これ、それ、あれは目下の人を指していふ語（卑稱）である。

東京語ニハあなたトコレヲ標準ト稱シ女子ノ語ハヤサシクリスルタメニ用ヒタルニヨリ

右の外、尊稱にこのおかた、そのおかた、あのおかたなどいふがある。又卑稱にこいつ、そいつ、あいつなどいふがある。

不定稱　どのかた、どなたなどは目上の人に對していふ語で（尊稱）、どのひと、だれなどは同輩又は目下の人に對していふ語（平稱又は卑稱）、どれは目下の人に對していふ語（卑稱）である。

右の外、尊稱にどのおかた、卑稱にどいつなどいふがある。

次に人代名詞の略表を掲げよう。

身分＼稱	自稱	對稱	他稱	不定稱
尊稱	あたし、わたくし、	あなた、あなた樣、	このかた、そのかた、あのかた、	どのかた、どなた、

平稱	わたくし、わたし、僕、あなし
卑稱	わたし、あなし、わし、おれ、ぬし
	あなた、君、
	おまへ、
	このひと、そのひと、あのひと、
	これ、それ、あれ、
	どのひと、だれ、どれ、
	どのひと、だれ、どれ、

指示代名詞とは事物、場所、方角などの名に代へて用ひる語である。前第五頁に示せる例のそれ（事物）、ここ（場所）、あっち、こっち（方角）など、皆これに屬する。

指示代名詞の中で、こ、これ、そ、それ、あ、あれ、ど、どれ、なにのやうに事物を指示するものを**事物代名詞**といひ、ここ、そこ、あそこ、あすこ、どこのやうに場所を指示するものを**場所代名詞**といひ、こちら、そちら、あちら、どちらのやうに方角を指示するものを**方角代名詞**といふ。これらの代名詞は、その指示する位置の遠近、定不定などによって、又次の四つに分ける。

近稱　こ、これ（以上事物）、ここ（場所）、こちら、こっち（以上方角）のやうに、自分の身に近い事物や、場所や、方角などを指し示すもの。

中稱　そ、それ（以上事物）、そこ（場所）、そちら、そっち（以上方角）のやうに、稍離れた事物や、場所や、方角などを指し示すもの。

遠稱　あ、あれ（以上事物）、あそこ、あすこ（以上場所）、あちら、あっち（以上方角）のやうに、自分の身よりずっと離れた事物や、場所や、方角などを指し示すもの。

不定稱　なに、どれ（以上事物）、どこ（場所）、どちら、どっち（以上方角）のやうに、不定な事物を指し示すもの。

事物ノ名稱ヲ以テ人代名詞ト為スリ方但ハ事ヲ等ナリ

（注意）○どれは選ぶ物事の不定な時に用ひ、なには、すべて物事の不定な時に用ひる。

○場所をぼんやりといふ時には、場所の代名詞の下にら又はいらをつけてここら、そこら、ここいら、そこいらなどいふ。

次に指示代名詞の略表を掲げよう。

種類＼稱	近稱	中稱	遠稱	不定稱
事物	こ、これ、	そ、それ、	あ、あれ、	ど、どれ、なに、
場所	ここ、	そこ、	あそこ、あすこ、	どこ、
方角	こちら、こっち、	そちら、そっち、	あちら、あっち、	どちら、どっち、

練習

次の文の中の代名詞の種類、稱などを擧げよ。

1 その　山　の　あちら　に　見える　の　は、何　といふ　山　ですか。

2 おまへたち　は、この　後　決して　あの　やうな　事　をしては　ならぬ。

動詞

3 螢　來い　來い、よい　水　の　ま　しょ。こっち　の　水　は　うまい。あっち　の　水　は　苦い。

4 これ　は　ここ　に、それ　は　そこ　に、あれ　は　あそこに、その　まま　お置き　なさい。

5 あの　おかた　は、大そう、あなた　や　わたくし　の　ため　を　思って　下さい　ます。

第四章　動詞

第一節　動詞の意義

鳥　が　啼く。　　火　が　消える。

猫　が　あそこ　に　居る。

右の啼くは鳥の動作を表はし、消えるは火の有樣を表はし、居るは猫の存在を表はして居る。かやうに、物事の動作、有樣又は存在を表はす語を動詞といふ。

第二節　動詞の活用

前例の動詞の中で、啼くは、

鳥が　啼かぬ。　鳥が　啼き　出す。

鳥が　啼く。　鳥よ　啼け。

語根　のやうに、啼か、啼き、啼く、啼けと語の形を變化する。さて

語尾　これらの語の中で、啼のやうに變化せぬ部分を語根といひ、

活用　ひ、か、き、く、けのやうに變化する部分を語尾といひ、その變化を活用といふ。

動詞の活用は、これを四段、か行三段、さ行三段、上一段、下一段の五種に別ける。今次にこれを概説しよう。

四段活用　**四段活用**　讀むといふ動詞は、

（ま・（あ段）本）を　讀まう。

（み・（い段）本）を　讀み　始める。

（む・（う段）本）を　讀む。

（め・（え段）本）を　讀め。

のやうに、五十音圖のあ、い、う、え四段に活用する。このやうに活用する動詞をすべて**四段活用の動詞**といふ。四段に活用する動詞はかがさたなはばまらの九行である。次の表を見よ。

行	語根	語尾
か行	書	かきくけ
が行	漕	がぎぐげ
さ行	推	さしすせ
た行	立	たちつて
な行	死	なにぬね

四段動詞

活用表				
は行	ひ	ふ	へ	
ば行	び	ぶ	べ	
ま行	み	む	め	
ら行	り	る	れ	

（注意）○文語のな行四段變格活用の動詞死ぬ、往ぬ及びら行四段變格活用の動詞有り、居り、は、口語では通例の四段に活用する　但し地方によっては、文語のやうに、死ぬる人、往ぬる人、死ぬれば、往ぬればなどともいふ。

○買ふ、思ふ、問ふ、叶ふなどのやうにわ行四段活用らしく思はれる動詞は、皆は行四段活用である。

か行三段活用　來るといふ動詞は、

こ（お段）春がやがてこよう。
き（い段）春がきた。

（発音ハ四段活用ニ類スル者ト雖モ語根ノ末尾ニ母音ヲ置ク者ハ「こ」トカ「ふ」トヲ交ヒテ用ヰルコトヲ然ラザレバ「こ」ト語根ノ末尾ニ至ルモノナリ。）

か行三段活用

『來』くる（う段）春がくる。
くれ（う段）早く春がくれればよい。

のやうに、五十音圖中のか行のあいの二段に活用し、更にう段の音にるれが加はって居る。このやうに活用する動詞をか行三段活用、又はか行變格活用の動詞といふ。

次の表を見よ。

行	語根	語尾
か行	『來』	こ
		き
		くる
		くれ

（注意）○『來』は語の全體を變化する動詞である。

○文語にはくといふ語尾があるが、口語にはない。

○か行三段活用の動詞は、ただ來るといふ語ばかりである。

さ行三段活用　爲るといふ動詞は、

さ行三段活用

せ（え段）悪い事は、せぬがよい。
し（い段）悪い事をした。
『爲』する（う段）悪い事をする。
すれ（う段）悪い事をすれば、人に憎まれる。

のやうに、五十音圖中のさ行のえいの二段に活用して、更にう段の音にるれが加はって居る。このやうに活用する動詞をさ行三段活用、又はさ行變格活用の動詞といふ。次の表を見よ。

行	語根	語尾
さ行	『爲』	せ	し	する	すれ

固有のさ行三段の動詞は、爲るの一語であるが、名詞又は漢語にこの語が附いて動詞となったものは誠に多い。

罰する、論ずる、勉強するなどは、皆その例である。

（注意）○文語にはおはすといふ語があるが、口語ではいはぬ。
○文語にはすといふ語尾があるが、口語にはない。
○するが、論や講のやうに、撥ねる音の下や、引く音の下に來るときには、論ぜ、論じ、講ぜ、講じのやうに、ざ行の三段に活用する。
○名詞や漢語が動詞となるときは、大部分さ行三段に活用するが、中には、譯す、愛すなどのやうに、さ行四段に活用するものもあり、察しる、達しるなどのやうに、さ行上一段に活用するものもあり、禁じる、高じるなどのやうに、ざ行上一段に活用するものもある。

上一段活用

上一段活用

落ちるといふ動詞は、

落ち（い段）木から落ちた。	落ちる（い段）木から落ちる。	落ちれ（い段）木から落ちれば、怪我をする。

のやうに、五十音圖の中のいの一段に活用して、さらにるれの二音が加はって居る。このやうに活用する動詞を**上一段活用の動詞**といふ。

上一段活用の動詞は、あかがただなはばまらわの十一行に活用する。次の表を見よ。

上一段動詞活用表

行	語根	語尾					
あ行	『射』	い	いる	いれ			
か行	起	き	きる	きれ			
が行	過	ぎ	ぎる	ぎれ			
た行	落	ち	ちる	ちれ			
だ行	閉	ぢ	ぢる	ぢれ			
な行	『煮』	に	にる	にれ			
は行	用	ひ	ひる	ひれ			
ば行	伸	び	びる	びれ			
ま行	『見』	み	みる	みれ			
ら行	懲	り	りる	りれ			
わ行	『居』	ゐ	ゐる	ゐれ			

やさ、行けやー

下一段活用

（注意）○文語の上二段活用は、口語では上一段に活用する。但し、九州のある地方では、文語と同じやうにいって居るところもある。

○文語のや行上二段の報ゆ、老ゆなどは、報いる、老いるとなって、あ行上一段のいると同じ形になる。よって便宜上これをあ行の活用に移して、や行を省く。

○上一段に活用する動詞の中で、假名遣のじと紛れ易いのは、怖ぢる、閉ぢる、綴ぢる、恥ぢる、攀ぢるなどだ行に屬する語である。

○用ひるは慣用上、は行とわ行との兩行に活用する。

下一段活用

越えるといふ動詞は、

（え段）峠を越えた。

越（え段）える　峠を越える。
（え段）れ　峠を越えれば、谷が見える。

のやうに、五十音圖中のえの一段に活用して、更にるれの二音がそれに加はって居る。このやうに活用する動詞を**下一段活用の動詞**といふ。

下一段活用の動詞は、あかがさざただなはばまらわの十三行に活用する。次の例を見よ。

下一段			
行	語根	語尾	
あ行	『得』	え	えれ
か行	『蹴』	け	けれ
が行	告	げ	げれ
さ行	馳	せ	せれ
ざ行	交	ぜ	ぜれ

や行の語は人や行ヲあ行ニ締メたるもの故なり。即チ語尾にあ行トや行トガ手ニ入タ故なり。

植　飢

動詞活用表			
た行	育	て	てる　てれ
だ行	撫	で	でる　でれ
な行	尋	ね	ねる　ねれ
は行	敎	へ	へる　へれ
ば行	總	べ	べる　べれ
ま行	改	め	める　めれ
ら行	枯	れ	れる　れれ
わ行	植	ゑ	ゑる　ゑれ

（注意）○文語の下二段活用は、口語では下一段に活用する。但し九州の一部地方では、文語と同じやうにいって居る處もある。

○ざ行下一段に活用するのは、交ぜるだけである。

○文語のや行下二段活用は、口語ではあ行下一段活用に轉ずる。

○あ行下一段活用で普通なものは、得る、甘える、愈える、覺える、聞こえる、泛える、凍える、越える、榮える、冱える、餧える、聳える、絶える、潰える、煮える、生える、映える、冷える、殖える、吼える、まみえる、見える、悶える、燃える、萌

ゐ行下一段ニハ植飢ノ外ニナシ。

えるなどで、わ行下一段に活用するのは、植ふる、餓ふる、据ふるの三語である。普通に使用する動詞で上の二類と紛れ易いものは、おほかたは、行下一段活用に屬する。

○蹴るを四段に活用させて居る地方もある。

練習

次の文の中の動詞を指摘して、一一その活用をいへ。

1 本を讀み、字を書き、算盤をはじく。
2 春は來たけれども、氷はまだ解けない。
3 尺取蟲の屈むのは、伸びようがためである。
4 大將を獲ようとするには、まづその馬を射るがよい。
5 早く起き、遲く寢て、一心に家業を勉めたから、やがて家運を挽回した。

次の文の中に假名遣の間違があるなら直せ。

1 まかぬ種は生へぬ。
2 鷹は飢へても穂はつまぬ。
3 どうぞお構ひ下さいますな。
4 築山には常磐木を植え、泉水には清水をたたへる。
5 過を悔ひ、輕擧を耻じて、絶へ入るばかりなげいた。

第三節　動詞の段

動詞の各變化は、それぞれ違った意義を持って居る。今便宜上普通文法の說き方に倣って、各動詞が六段の變化をするものとして、各段の意味を次に說明しよう。

四段活用の動詞の段

四段活用の動詞の六段變化は、次の通りである。（假に讀むを例として論ずる。）

語尾の段／語根	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段	第六段
讀	ま	み	む	む	め	め

第一段讀まは、

これ　から　新聞　を　讀ま　う。

のやうに、多くうにつづいて未來卽ち將然の意を示す。

將然段

依って通常この段を**將然段**といふ。

この段の語にぬ、ないなどいふ打消の意味の語を加へれば、その動作を打ち消す意となる。

第二段讀みは、

新聞　を　讀み　始め　た。

この　新聞　は　讀み　惡い。

連用段

のやうに、多く用言（即ち動詞、形容詞）につづく。よって此の段を通常**連用段**といふ。

（注意）○此の段は「本を讀み、字を書く」のやうに、中止即ち言ひさして他の語に移る場合にも用ひ、又「讀みはよくわかったが、意味はわからぬ」の讀みのやうに、名詞にも轉用する。

第三段讀むは、

新聞　を　讀む。

終止段

のやうに、文章を言ひ止める場合に用ひる。よって此の段を通常**終止段**といふ。

第四段讀むは、

新聞　を　讀む　男。

連體段

のやうに、體言（即ち名詞、代名詞）に續く。よって此の段を通常**連體段**といふ。

第五段讀めは、

新聞　を　讀め　ば、見聞　が　廣く　なる。

假定段

のやうに、或事件を假に定めていふ意に用ひる。よって此の段を通常**假定段**といふ。

（注意）○文語の第五段は已然（確定）の意で、口語とは意味が全く違ふ。

第六段讀めは、

命令段

新聞を讀め。

のやうに、命令の意となる。よつて此の段を通常命令段といふ。

か行三段活用の動詞の段

か行三段活用の動詞の段は次の通りである。

將然　こ(よう)……友だちがやがてこよう。

(注意)○この段の動詞にぬ、ないをつけて「こぬ」「こない」とすれば、否定の意になる。

連用　き……友だちが、きはじめる。

(注意)○この段の動詞は「兄もき、弟もくる」のやうに、中止の形にもなり、又「往きき」のやうに、他の詞と熟して名詞の形にもなる。

終止　くる……友だちがくる。

連體　くる……くる友だちを待つ。

(注意)○終止段と連體段とは同形である。

さ行三段活用の動詞の段

假定　くれ……早く友だちがくれば よい。

命令　こい……早くこい。

(注意)○四段活用の動詞は、その語尾に他の語を添へないても命令の意となるが、この活用の動詞では、將然段のこによ又はいを添へねば命令の意とはならぬ。

さ行三段活用の動詞の段は、次の通りになる。

將然　せ(う)……善い事・をせう。　し(よう)……　よう。

(注意)○さ行三段活用の將然段は、せ、し兩樣に活用する。そして、せにはうが添はつて將然の意をあらはし、しにはようが添はつて將然の意をあらはす。但し、今日の普通語では、多くしようの方を用ひる。

○このせにぬ(ん)をつけた「せぬ(ん)」、及びしにないをつけた「しない」は、共に否定の意を表はす。

連用　し……仕事をしはてる。

(注意)○このしは、「讀みもし、書きもする」のやうに、中止の形にもなる。

終止　する……善い　事を　する。

連體　する……善い　事を　する　人。

(注意)○終止段と連體段とは同形である。

假定　すれ……善い　事を　すれば、よい　報が　ある。

命令　せよ／せい／しろ……善い　事を　せよ。／せい。／しろ。

(注意)○命令段を作るには、將然段のせに「よ」又は「い」をつけ、或は「し」に「ろ」をつける。

上一段活用の動詞の段

上一段活用の動詞の段は、次の通りになる。

將然　起き(よう)……やがて、起き　よう。

(注意)○この段の動詞に「ぬ(ん)」「ない」をつけた「起きぬ(ん)」、「起きない」は、否定の意になる。

連用　起き……寢床　から　起き　あがる。

(注意)○この段の動詞は「早く起き」、「遲く寢る」のやうに、中止の形になることがある。又「早起き」をするのやうに、他の語と熟して名詞の形になることもある。

終止　起きる……朝　は　早く　起きる。

連體　起きる……早く　起きる　人　は、勤勉　の　人　で　ある。

(注意)○上一段活用の動詞は、將然段と連用段と同形で、終止段と連體段とも亦同形である。

假定　起きれ……早く　起きれ　ば、心持ち　が　よい。

命令　起き／い／ろ……よ。／い。／ろ。……早く　起き／い／ろ……よ。／い。／ろ。

(注意)○上一段活用の命令段も亦、將然段の語によ、い又はろをつけてこれを作る。

下一段活用の動詞の段

下一段活用の動詞の段は、次の通りになる。

將然　明け(よう)……やがて、夜が明けよう。

(注意)○この段の動詞にぬ(ん)、ないをつけた「明けぬ(ん)」、「明けない」は、否定の意になる。

連用　明け……夜が明け離れた。

(注意)○この段の動詞は、「夜も明け、空も晴れた」のやうに、中止の形にもなり、又「夜明けの景色」のやうに、他の語と熟して名詞の形にもなる。

終止　明ける……夜が明ける。

連體　明ける……夜の明ける頃まで、昔話をした。

(注意)○下一段活用も、上一段活用と同樣に、將然段と連用段とが同形で終止段と連體段とも亦同形である。

假定　明けれ……早く夜が明ければよい。

命令　明け(よ)(い)(ろ)……早く明け(よ)(い)(ろ)。

(注意)○下一段活用の命令段も、亦將然段の語によ、い又はろをつけてこれを作る。

以上五種の動詞の段を表にして左に示さう。

活用	語根	第一段 將然	第二段 連用	第三段 終止	第四段 連體	第五段 假定	第六段 命令
四段	讀	よ(う)	み	む	む	め	め
か行三段	『來』	こ(よう)	き	くる	くる	くれ	こい
さ行三段	『爲』	せ(う)し(よう)	し	する	する	すれ	せよ せいしろ
上一段	起	き(よう)	き	きる	きる	きれ	きよ きいきろ
下一段	明	け(よう)	け	ける	ける	けれ	けよ けいけろ

第四節　動詞の自他

鳥　が　鳴く。　　火　が　消える。

右の鳴く、消えるは、その動作を起す事物、即ち鳥火の動作をいひあらはすばかりで、他の事物を左右する性質を持つて居ない。かやうに、動作を他物に及ぼさぬ動詞を自動詞といふ。

子供　が「犬　を」追ふ。

蠶　は「桑　の　葉　を」たべる。

右の追ふ、たべるは、それに犬、桑の葉などいふ目的の語を加へなければ、動作者即ち子供や蠶の動作を完全にいひあらはすことが出來ぬ。即ち「子供が追ふ」、「蠶は食べる」だけでは意味が通ぜぬ。かやうに、その動作を他物に及ぼす動詞を他動詞といふ。

（注意）○他動詞の目的となる語には、通例をといふ語を添へる。しかし「人が路をあるく」、「鳥が空を飛ぶ」、「子供が門を出る」のやうに、を が自動詞あるく、飛ぶ、出るなどにつくこともある。

動詞には、

風が吹く。（自動）（か四）

門が閉ぢてある。（た上一）

柳の枝が垂れて居る。（ら下一）

人が笛を吹く。（他動）（か四）

門を閉ぢて、人を容れぬ。（た上一）

柳が、枝を垂れて居る。（ら下一）

のやうに、自他によつて活用の違はぬものもある。又、

子供が育つ。（自動）（た四）　　子供を育てる。（他動）（た下一）

帶が解ける。(か下一)　帶を解く。(か四)

日が延びる。(ば上一)　日を延べる。(ば下一)

のやうに、自他によって活用の違ふものもある。又、

足る(ら四)(自)　足す(さ四)(他)　通る(ら四)(自)　通す(さ四)(他)

隱れる(ら下一)隱す(さ四)　流れる(ら下一)流す(さ四)

乘る(ら四)　載せる(さ下一)寄る(ら四)　寄せる(さ下一)

のやうに、語尾のすせるとるれるとによって、自他の區別のあるものもある。又、

生きる(か上一)(自)生かす(さ四)(他)　動く(か四)(自)　動かす(さ四)(他)

燃える(あ下一)燃やす(さ四)　懲りる(ら上一)懲らす(さ四)

盡きる(ら上一)盡くす(さ四)　許りる(ら上一)許るす(さ四)

及ぶ(ば四)　及ぼす(さ四)　落ちる(た上一)落とす(さ四)

のやうに、自動詞の語尾が、あ段、う段、又はお段となって、これにすの語尾がついて、他動詞になるものもある。又、

ふたぐ(が四)(他)　ふたがる(ら四)(自)　止める(ま下一)(他)　止まる(ま四)(自)

のやうに、他動詞の語尾があ段となって、これにるの語尾がついて自動詞になるものもある。

次の動詞の自他を區別せよ。又、これに對する自動又は他動の動詞があるなら、これを示せ。

助ける。わかる。滅びる。干す。おびやかす。照る。

塞がる。苦しむ。碎ける。馴らす。出す。倒れる。

第五節　動詞の音便

花が咲い(き)た。

急い(ぎ)で見に行かう。

練習

外来語ハサケミ段ニ用ウト共ニ又ラ行四段活ニナスコト得ベシ　例ウンリルレ　ハイカラン　ヤジウマ　ヤジウリ　ケンゼンビョウ

先生に問う(ヒ)で、見よう。

花は散つ(り)でも、惜しくない。

字を書い(き)たり、本を讀ん(ミ)だりする。

右の例のやうに、四段活用の動詞の連用段が、た(だ)て(で)て(も)(でも)たり(だり)と續くときには、その語尾がい、う、つ、んなどに轉ずることがある。これを動詞の音便といふ。

動詞の音便を別けて、**い音便**、**う音便**、**撥音便**及び**促音便**の四種とする。

い音便とは、動詞の語尾のき、とぎがいに轉じたものをいふ。次の例を見よ。

咲き(た)(て)(ても)(たり)……咲い(た)(て)(ても)(たり)　急ぎ(た)(て)(ても)(たり)……急い(だ)(で)(でも)(だり)

（注意）○ぎがい音便に轉ずる時には、次につづく語が濁音になる。

○近畿地方では、動詞の語尾のしをいに轉じて「指した、指して、指しても、指したり」を「指いた、指いて、指いても、指いたり」などのやうにいふ。

○「咲いた」、「急いで」、「指いたり」などと書いてはならぬ。

う音便とは、動詞の語尾のひがうに轉じたものをいふ。

次の例を見よ。

問ひ(た)(て)(ても)(たり)……問う(た)(て)(ても)(たり)

（注意）○「問おた」、「問をた」などと書いてはならぬ。

撥音便とは、動詞の語尾のに、び、みが撥音んに轉じたものをいふ。次の例を見よ。

死に(た)(て)(ても)(たり)……死ん(だ)(で)(でも)(だり)　飛び(た)(て)(ても)(たり)……飛ん(だ)(で)(でも)(だり)

讀み（たてたりても）……讀ん（だでだりても）

（注意）○撥音便に轉ずるときには、次につづく語が濁音になる。

促音便とは、動詞の語尾のち、ひ、りが促音に轉じたものをいふ。次の例を見よ。

持ち（たてたりても）……持つ（たてたりても）

思ひ（たてたりても）……思つ（たてたりても）

散り（たてたりても）……散つ（たてたりても）

練習

次の文の中の音便を説明せよ。

1、棒ほどの事を願って、針ほどかなふ。
2、きのふは、終日雨が降ったり、風が吹いたりした。
3、細い道を、川に沿うて、南を指いて、下って行った。
4、朝は星を戴いて出、晩は月を踏んで歸る。
5、昨日は、日曜日であったから、海濱にいって、舟を漕いだり、水を泳いだりした。

第五章　形容詞

第一節　形容詞の意義

山が高く、水が美しい。

水が清ければ、飲料にしよう

右の高く、美しい、清ければは、物事の性質や有様をあらはす語である。かやうな語を**形容詞**といふ。

第二節　形容詞の活用

前例の形容詞の中で、清ければは、

水が清く澄む。

語根
語尾

水　が　清い。
水　が　清けれ　ば、飲料　に　し　よう。

のやうに、清く、清い、清けれと活用する。而して、清のやうに變化しない部分を語根といひ、く、い、けれのやうに變化する部分を語尾といふ。

形容詞には、語根にし又はじのあるのと、ないのとある。しかし、その活用は、ただ前に述べた一種である。次の表を見よ。

語根	語尾	
高		
美し	く	
	い	
		けれ

(注意)○文語では、第一類、第二類の別があって、語根にし又はじがつくとつかないとで、活用が幾らかちがふが、口語では全く一樣になる。

○同じといふ形容詞は、通常いの語尾を加へずに使用される。

第三節　形容詞の段

形容詞も、亦動詞のやうに連用、終止、連體、假定等の段に分けることが出來る。今、清いといふ形容詞についてこれを説明しよう。

形容詞の段

水　が　清く　澄む。

連用段

右の清くは、用言澄むに續く。故にこれを**連用段**といふ。

(注意)○形容詞の連用段は、多く副詞として用ひる。此の例の清くも、亦副詞の形に用ひたものである。

○この清くを、音便で清うといふことがある。即ち、う音便の一種である。「うれしう思ふ」「ありがたうぞんします」などのうも、亦此の例である。

○この清く、うれしく、ありがたくなどが、て、てもにつくときには、清くっ

て、うれしくってもありがたくってのやうに、促音に伴ひ、或は清うて、うれしうてものやうに、う音便に轉ずる。

この段の形容詞は、又、

水は清く、沙は白い。

のやうに、**中止の形**に用ひ、或は、

遠くの親類より、近くの他人。

のやうに、**名詞の形**に用ひる。

水は清い。

右の清いは、事を言ひ切った形である。故にこれを**終止段**といふ。

水の清い川。

右の清いは、體言につづく形である。故にこれを**連體段**といふ。

終止段

連體段

キャー ナニナリ ヒキ ヲ エ ベ。
カー ナリ ヒャー イタイ

あの山は高く ある
アノ山ハ高イ

假定段

水が清ければ、飲料にしよう。

右の清けれは、事を假に定める形である。故にこれを**假定段**といふ。

(注意)○文語形容詞の清けれは已然の意で、口語でいふ清けれとは意味が違ふ。

以上を表にすれば、次の通りになる。

語根	連用	終止	連體	假定
清	く	い	い	けれ

けれは「ばがつケバリャー」トさんず
ことに注意シテ直スヤウ要ス

(注意)○「水が清くば、飲料にしよう」のやうに、清くを動詞の將然段のやうな形に用ひることもあるが、これは、口語では普通な言ひ樣ではない。よって表からはこれを省いて置く。

●形容詞の連用段が「ある」につづくときには、その語尾のくと、あるのあとが約まって、からかりと活用する。而して、からは將然段、かりは連

用段である。次の例を見よ。

善からう。　善かりさうだ。

美しからう。　美しかりさうだ。

○このかりが、た又はたりにつづくときには、音便で、りが促音になる。

次の例を見よ。

善かっ(た。たり)　美しかっ(た。たり、

○對稱する場合に限って、遅かれ、早かれのやうに、かれといふ命令段を用ひることがある。

次の文の形容詞の段を示せ。

1、廣く長い橋を渡って、にぎはしい町に出た。

2、戸外の遊戯は數が多いけれど、ベースボールほどおもしろい遊戯は少ない。

3、須磨のあたりは、松が青く沙が白くって、風景の美しいことは、繪も及ばぬ。

次の文に假名遣の間違があるなら直せ。

練習

4、悲しひこともあれば、うれしゐこともある。

5、おそろしい雨ををかして、一隊の兵士が、隊伍正しふ進んで來た。

第六章　助動詞

第一節　助動詞の意義

花は　まだ　咲かぬ。

はや　日が　暮れた。

右のぬ、たなどは、動詞の下に附いて、その意味を助けてゐる。かやうな詞を助動詞といふ。

第二節　助動詞の種類、活用及び動詞との續き方。

助動詞は、その動詞に添うて表はす意味によって、次の九種に分ける。今一一これを略説しよう。

一、時の助動詞　「雨が降る」、「鳥が歌ふ」などのやうに、現在の動作を表はすには動詞の終止段をそのまま用ひればよいが、過去に起つた動作や、未來に起るべき動作を示さうとするには、助動詞の助を借らねばならぬ。かやうに、動詞を助けて、過去の動作や未來の動作を顯はす語を總稱して**時の助動詞**といふ。

時の助動詞

時の助動詞に完了又は過去を表はすものと、未來を表はすものとある。完了又は過去を表はすには、たを用ひる。

完了又は過去の助動詞

次の例を見よ。

今しがた　學校　から　歸つ　た。（完了）

昔、太閤　と　いふ　英雄　が　居　た。（過去）

（注意）○たが、が行、な行、ば行、ま行の四段活用の動詞に附く時には、音便で

動詞の語尾がい又はんに轉じ、それと同時にたがだになる。次の例を見よ。

磨いだ（が行四段）。　往んだ（な行四段）。　飛んだ（ば行四段）。　讀んだ（ま行四段）。

たは動詞の連用段につづき、たら、て、たと活用する。而してその各段の用法は次の通りである。

將然　たら（だら）…公園　の　櫻　は、もう　咲いたら　う。

連用　て（で）…公園　の　櫻　が、美しう　咲いて　居る。

終止　た（だ）…公園　の　櫻　は、もう　咲いた。

連體　た（だ）…花　が　咲いた　頃、花見に　出かけ　よう。

假定　たら（だら）…花が咲いたら、花見を
　　し　よう。

（注意）○將然段と假定段とは同じ形で、終止段と連體段とも亦同じ形である。

○將然段は、多くうと結び付いて過去を推量する意となる。

○時としては、「いって見たら、花は散って居た。」のやうに、たらを既定の意に用ひることがある。又たれにばを附けて、「いって見たれば……」などいふ人もある。

○このてを關係詞として論ずる人もある。

未來の助動詞

未來を表はすには、う又はようを用ひる。次の例を見よ。

明日は、雨が降らう。
　　おっつけ、日が暮れよう。

うは、四段活用の動詞の將然段につき、ようは、其の他の活用の動詞の將然段につく。但し、さ行三段活用には、爲（シ）よ

うとつづいて、爲（セ）ようとはつづかぬ。次の例を見よ。

（四）　咲かう。　（か三）來（コ）よう。　（さ三）爲（セ）う　爲（シ）よう

（上一）　落ちよう。　（下一）捨てよう。

打消の助動詞

二、打消の助動詞　ぬ（ん）、ない、まいなどの助動詞は、

風は吹かぬ（ん）。ない。
風は吹くまい。

のやうに、動作、有樣を打消す意に用ひる。よって**打消の助動詞**といふ。但しまいは推量して打消すに用ひる。

ぬ、ないは動詞の將然段に附く。但し、さ行三段の將然段につく時には、次のやうになる。

せ　ぬ（ん）。
　　し　ない。

まいは四段活用の終止段、その他の活用の將然段につく。

次の例を見よ。

(四)　行く　まい。　(か三)來　まい　(さ三)爲　まい。

い　(上一)起き　まい。　(下二)捨て　まい。

(注意)○まいは、文語のまじの音便である。

○地方によっては、くまい、くるまい、すまい、するまいなどともいふ。

ぬはず、ぬ(ん)、ねと活用する。而してその各段の用法は次の通りである。

連用　ず……雨　が　絶　え　ず　降る。

(注意)○このずは「雨も降らず、風も吹かぬ」のやうに、中止の形に用ひることがある。又「見ず知らずの人」のやうに、他の語と合して名詞の形に用ひることもある。

終止　ぬ(ん)……雨　が　絶　え　ぬ(ん)。

連體　ぬ(ん)　雨　の　降　ら　ぬ(ん)　日　は　少　な　い。

假定　ね……もう　雨　が　降　ら　ね　ば　よ　い　に。

(注意)○終止段ぬの過去になんだといふがある。これは「昨日は行かなんだらう」(將然)「昨日は行かなんだ」(終止)。昨日行かなんだ人(連體)。「行かなんだら(假定)困るだらう。」のやうに活用する。

ないは、なく、ない、なけれと活用する。そしてその段は次の通りになる。

連用　なく……友だち　が　來　なく　なる。

(注意)○このなくは、動詞ありと結びついて、なから(將然)なかり(連用)と活用する。次の例を見よ。

「ともだちが來なからう。」「ともだちが來なかりさうだ。」

○このなかりのりは、だ、たりにつづくときには、「なかった」「なかったり」のやうに、音便で促音っに轉ずる。

終止　ない……友だちが來ない。

連體　ない……友だちの來ない日。

假定　なけれ……友だちが來なければ、淋しからう。

まいは活用せぬ。

推量の助動詞

三、推量の助動詞　う、よう、だらう、でせう、らしいは、

あの山は高からう。

あの木は、多分枯れよう。

明日は花が咲く（だらう。でせう。）

花が咲いたら、綺麗（だらう。でせう。）

あの男はなかなか勉強するらしい。

のやうに、動作又は有樣を推量していふに用ひる。よってこれを**推量の助動詞**といふ。

うは四段活用の動詞の將然段につき、ようはその他の活用の動詞の將然段につき、（但し、さ行三段活用には、しようとつづいて、せようとはつづかぬ。）だらう、でせうは連體段につき、らしいは終止段につく。

だらう、でせうは、體言にもつく。前例綺麗でせう（だらう）や、賑かだらう（でせう）などは、此の一例である。

（注意）○う、ようは未來の助動詞の轉じたものである。

○だらう、でせうは、實は指定の助動詞の將然段だら、でせに推量のうを附けたものである。けれども、便宜上、ここには一語として論じたのである。

○だらうをじやらう、やらうといふ地方もある。

○でせうをでしようと書くのは正しくない。

う、よう、だらう、でせうは、活用せぬ。らしいは、らしく、らし

いと活用する。そして、その各段の用法は次の通である。

連用　らしく……雨が　降る　らしく　見える。

(注意)○このらしくは、音便でらしうとなることがある。

○らしくにあったがつづく時には、約まって、らしかったとなる。

終止　らしい……雨　が　降る　らしい。

連體　らしい……雨　が　降る　らしい　天氣模様

で　ある。

(注意)○らしいは、文語のらしの轉じたものである。

四、受身の助動詞　れる、られるは、

猫　が、犬　に　かま　れる。

馬丁　が、馬　に　蹴　られる。

のやうに、他のものから動作をしかけられる意に用ひる。よってこれを**受身の助動詞**といふ。

受身の助動詞

犬が太郎に打たれる。

自動

西隆盛が陸人西に降れる

此ノ主語ハ他ノ人ニ

身動詞ハ受身ノ助動詞ニ変ズルハ日本文ノ特長ナリ。

受身ナレバニトヲフコトヲ補足語ヲ要ス

れるは四段活用の動詞の將然段につき、られるはその他の活用の動詞の將然段につく。次の例を見よ。

(四)　かま　れる。　(か三)　來　られる。

(さ三)　爲　られる。　(上一)　起き　られる。

(下一)　捨て　られる。

(注意)○さ行三段活用の動詞の語尾せにられるがつくときには、多くはせらが約まってさとなる。次の例を見よ。

せられる……される。譴責せられる……譴責される。

れるは、れ、れる、れれと活用し、られるはられ、られる、られれと活用する。そして、その各段の用法は次の通である。

れるの例

將然　れ……親　に　叱ら　れ　よう。

(注意)○此のれに、ぬ(ん)、ないを附けて、「叱られぬ(ん)」「叱られない」とすれば、否

定の意になる。

連用　れ……親　に　叱られ　た。

(注意)○此の段の語は、又「親には叱られ、人には笑はれる」のやうに、中止の意に用ひることがある。

終止　れる……親　に　叱られる。

連體　れる……親　に　叱られる　子供。

(注意)○將然段と連用段、及び終止段と連體段とは同形である。

假定　れれ……親　に　叱られれば、つらからう。

命令　れ(ろ)い……親　に　叱られ(ろ)い(よ)。

られるの例

將然　られ……馬　に　蹴られ　よう。

(注意)○此の段の語にぬ(ん)ないをつけて、「蹴られぬ(ん)」「蹴られない」とすれば、否定の意になる。

連用　られ……馬　に　蹴られ　た。

(注意)○此の段は、又「馬には蹴られ、牛にはつかれる」のやうに、中止の意にも用ひる。

終止　られる……馬　に　蹴られる。

連體　られる……馬　に　蹴られる　馬丁。

(注意)○將然段と連用段及び終止段と連體段とは同形である。

假定　られれ……馬　に　蹴られれば、痛からう。

命令　られ(ろ)い……馬　に　蹴られ(ろ)い(よ)。

五、可能の助動詞

一日　に　十里　は　行かれる。

私も此の問には答へられる。

のやうに、自分の力である動作をすることができる意を示す。かやうに用ひたときは、これを**可能の助動詞**といふ。可能の助動詞れる、られるは、その活用も、段も、動詞とのつづき方も、全く受身の助動詞と同様である、但し、命令段はない。

四段活用の動詞に可能のれるがつくときには、その語尾とれとが約まって、え段の音になる。次の例を見よ。

讀まれる——讀める。　打たれる——打てる。

飛ばれる——飛べる。　言はれる——言へる。

(注意)○さ行三段の動詞の將然段せにられるがつくときには、せらが約まってさとなることは、前の受身の場合と同様である。

使役の助動詞

六、使役の助動詞

せる、させるは、

左官に壁を塗らせる。

大工に家を建てさせる。

のやうに、他のものを使役してある動作をさせる意を示す。よってこれを**使役の助動詞**といふ。

せるは四段活用の將然段につづき、させるは、その以外の活用の將然段につづく。但し、さ行三段活用には、爲させるとつづいて、爲させるとはつづかぬ。次の例を見よ。

(四)塗ら　せる。　(か三)來　させる。　(さ三)爲　させる。

(上一)起き　させる。　(下一)捨て　させる。

(注意)○さ行三段の動詞の將然段にさせるがつく時には、せさが約まってさとなる。次の例を見よ。

せさせる——させる。　勉強せさせる——勉強させる。

せるは、せ、せる、せれと活用し、させるは、させ、させる、させれと活用する。そして、その各段の用法は次の通りになる。

せるの例

將然　せ……左官に壁を塗らせよう。

（注意）○このせにぬ（ん）ないをつけた「塗らせぬ（ん）」、「塗らせない」は、否定の意になる。

連用　せ……左官に壁を塗らせた。

（注意）○この段のせは、「壁を塗らせ、屋根を葺かせる」のやうに、中止の形にも用ひる。

○將然段と連用段とは同形である。

終止　せる……左官に壁を塗らせる。

連體　せる……左官に壁を塗らせる事にきめた。

（注意）○終止段と連體段とは同形である。

假定　せれ……あの左官に壁を塗らせれば、うまく塗るだらう。

命令　せ（い・よ・ろ）……壁を塗らせ（い・よ・ろ）。

させるの例

將然　させ……大工に家を建てさせよう。

（注意）○このさせにぬ（ん）ないをつけた「建てさせぬ（ん）」、「建てさせない」は、否定の意を示す。

連用　させ　大工に家を建てさせた。

（注意）○このさせは、「家を建てさせ、屋根を葺かす」のやうに、中止の意にも用ひる。

○將然段と連用段とは、同形である。

終止　させる……大工に家を建てさせる。

連體　させる……大工に家を建てさせる人。

（注意）○終止段と連體段とは、同形である。

假定　させれ……あの大工に建てさせれば、うまく建てるだらう。

命令　させ（ろ・い・よ）……大工に家を建てさせ（ろ・い・よ）

尊敬の助動詞

七、尊敬の助動詞　れる、られる、ますは、

先生は、よく字を書かれる。

父上は、毎朝早く起きられる。

今日は、よい天氣でございます。

のやうに、他人の動作を敬つて言ふ場合や、動作を丁寧にいふ場合などに用ひる。よつてこれを尊敬の助動詞といふ。れる、られるの動詞との續き方、活用及び段は、すべて受身のれる、られると同様である。

ますは動詞の連用段につづき、ませ、まし、ます、ますれと活用する。そして、その各段の用法は次の通りである。

將然　ませ……やがて、雨が降りませう。

（注意）○このませにぬ（ん）をつけた「降りませぬ（ん）」は、否定の意になる。

○否定のないは、ませにはつかぬ。

連用　まし……雨が降りました。

終止　ます……雨が降ります。

（注意）○このますにるをつけて「雨が降りまする」ともいふ。

連體　ます……雨の降ります日は、陰氣

です。

假定　ますれ……雨が降りますれば、困ります。

命令　ませ……どうぞ、お許し下さいませ。

（注意）○このませをましといふこともある。

○このませ又はましは、尊敬又は謙遜の意を有する動詞なさる、下さる、遊ばすなどの連用段なさり（音便なさい）下さり（音便下さい）遊ばしなどにばかりつく、

八、指定の助動詞　だ、ですは、これは私の本だ。あたりがたいそう靜かだ。私は散歩するのです。のやうに、ある事柄を指定していふ意に用ひる。よって、これを指定の助動詞といふ。

指定の助動詞

特殊　連用
だら　だで
でせ　でし
でで

終止
だ。
です。

だ、ですは、體言につき、又のを媒として、體言並に用言の連體段につく。前の例を見よ。

（注意）○だ、ですは、又動詞の連用段におを冠らせたものにもつく。次の例を見よ。

字をお書きだ。

どちらへお出でですか。

○この靜かだの類を、形容詞として論ずる人もある。

だはだら、で、だっ、だと活用し、ですはでせ、でし、で、ですと活用する。今その各段の用法を次に述べよう。

だの例

將然　だら……これは、あなたの本だらう。

連用　だっ……あれは、私の本だった。

（中止） で……これは私の本で、あれは友人の本だ。

（注意）○他の多くの場合には、連用段が中止の形になるが、この助動詞ではさうでない。

終止 だ……これは、私の本だ。

ですの例

將然 でせ……あの人は、どこへ行くのでせう。

連用 でし……あれは、學校へ行くのでした。

（中止） で……これは、時事新聞です。

（注意）○だもですも、中止の意を表はすときには、同じくでとなる。

終止 です……あの子供は、學校へ行くのです。

（注意）○だにも、ですにも連體段はない。

○だらでせに推量のうを加へただらうでせうは、轉じて推量の助動詞になる。そして、用言の連體段につづく。次の例を見よ。

雨が降るだらう。　もう、よほど遲いでせう。

○「雨がもう止んだらう」のやうに、過去推量のたらうが音便でだらうと濁ったものと、前例のやうな本來のだらうとを混じてはならぬ。

○のを媒として、だですが用言の連體段につく時には、そのが撥音んに轉ずることがある。次の例を見よ。

歸るんだ。　惡いんです。

右の外、指定助動詞の一種になならと活用するものがある。これは、或一種の體言（靜か立派の類）につく。そして、なは連體段、ならは假定段である。次の例を見よ。

な（連體）……（静かな夜。立派な庭。）

なら（假定）……（今少し静かなら、よからうに。庭が立派なら、見に行かう。）

（注意）○このなならは、文語指定の助動詞なりの轉じたものである。
○この静かな、立派ななどを、形容詞として論ずる人もある。
○ならの下にばを加へて、假定の意に用ひることもある。

希望の助動詞

九、希望の助動詞　たいは、

勉強もしたい、運動もしたい。

のやうに、ある事柄を希望する意に用ひる。よってこれを**希望の助動詞**といふ。

たいは用言の連用段に附いて、たく、たい、たけれと活用する。そして、その各段の用法は次の通りである。

連用　たく……本を讀みたく思ふ。

（注意）○このたくは、う音便てたうに轉ずることがある。
○この段は、又「本も讀みたく、字も書きたい」のやうに、中止の形になることもある。
○たくに動詞のあるがつくと、約まってたから、たかりとなる。次の例を見よ。

見たからう。　見たかりさうだ。

○このたかりのりは、又た或はたりにつづく時には、促音便となる。次の例を見よ。

見たかった。　見たかったり、聞きたかったりする。

終止　たい……本が讀みたい。

連體　たい……讀みたい本を讀む。

（注意）○終止段と連體段とは、同形である。

假定　たけれ……讀みたければ讀み、書きたければ書く。

（注意）○たいは、文語のたしの音便である。
○たくを將然段に用ひて、「行きたくば行かう」のやうにいふことがある。
しかし、口語ではあまり用ひぬ。

次に助動詞の種類と活用との一覽表を掲げよう。

		動詞	將然	連用（中止）	終止	連體	假定	命令
時	完了	來キ	たら（う）	て	た	た	たら	×
	過去	讀ん	（だち「う」）	（で）	（だ）	（だ）	（だら）	×
	未來	讀ま	×	×	う	×	×	×
		來コ	×	×	よう	×	×	×
打消		讀ま	×	ず	ぬ（ん）	ぬ（ん）	ね	×
		來コ	× （なから「う」）	なく（なかり）（なかっ）	ない（なんだ）	ない	なけれ	×
		讀む	×	×	まい	×	×	×
推量		讀ま	×	×	う	×	×	×
		來コ	×	×	よう	×	×	×
		讀む	×	×	だらう	×	×	×
		來る	×	×	てせう	×	×	×
		讀む	×	らしく（らしかっ）	らしい	らしい	×	×

受身	讀ま	れ（よう）	れ	れる	れる	れれ	れ（ろいよ）
可能	來コ	られ（よう）	られ	られる	られる	られれ	られ（ろいよ）
使役	讀ま	せ（よう）	せ	せる	せる	せれ	せ（ろいよ）
	來コ	させ（よう）	させ	させる	させる	させれ	させ（ろいよ）
尊敬	讀ま	れ（よう）	れ	れる	れる	れれ	れ（ろいよ）
	來コ	られ（よう）	られ	られる	られる	られれ	られ（ろいよ）
	讀み來キ	ませ（う）	まし	ます（ますする）	ます	ますれ	ませ*（まし）
指定	書物行くの立派	だら（う）	だって（中止）	だ	×	×	×
		てせ（う）	てして（中止）	てす	×	×	×
		×	×	×	な	なら	×
希望	讀み來キ	×（たから）	たく（たかり）（たかっ）	たい	たい	たけれ	×

*尊敬の助動詞ますの命令段ませと動詞とのつづき方については、六十六頁（注意）の條を見よ。

練習

次の文の助動詞の種類、活用、動詞との續き方を説明せよ。

1. 雨がやんだら、遠足に出よう。
2. ここに塵をすててはならぬ。
3. どうか人間らしい人間になってもらひたい。
4. 雨は降るだらう、しかし、風は吹くまい。
5. 珍らしうはあるまいが、遠方から到來した品だから、お目に懸けたのです。
6. 庭は下女に掃除をさせよう。おまへは、座敷の掃除をしろ。
7. 父は父の道をつくさないでも、子は子の道を守らねばならない。

助動詞相互の接續

第三節　助動詞と助動詞のつづき方

東京も大雨が降ったらう。

某大將は、戰死せられたらしい。

右の例のやうに、助動詞はただ動詞につくばかりでなく、他の助動詞にもついて、その語の意味を強めたり、完全にしたりする。即ち、たら、うは過去のたに推量のうが添はって過去の推量を表はし、られ、た、らしいは、尊敬のられに、過去のた、推量のらしいが添はって、過去の推量を丁寧に言ひ表はして居る。

すべて、ある助動詞が他の助動詞につづくのは、その助動詞が動詞につづく規定と大略同様である。例へば、たらうのうは動詞の將然段につづく助動詞であるから、助動詞にも亦將然段（ここでは過去の助動詞たの將然段たらにつづいて居る。）に續き、戰死せられたらしいのたは動詞の連用段につづく助動詞であるから、助動詞にも亦連用段（ここでは尊敬助動詞られるの連用段られにつづいて居る。）につづき、らしいは動詞の終止段につづく助動詞であるから、助動詞にも亦終止段（ここでは過去助動詞の終止段たにつづいて居る。）につづく類である。併し、まま例外もある。

次に助動詞と助動詞との續き方の重なるものの一覽表を掲げよう。

助動詞の種類／段	將然段	連用段	終止段連體段
完了時過去	たら（だら）う		た（だ） だらう　てせう　らしい　（の）だ　（の）です
打消	（なから）（なんだら）う	（なかっ）た	ぬ（ん）　ない だらう　てせう　らしい　（の）だ　（の）です
推量	（らしから）う	（らしかっ）た	
受身可能	れ　られ	れ　られ　ます　たい　た	れる　られる だらう　てせう　らしい　（の）だ　（の）です
使役	せ　させ	せ　させ　ます　たい　た	せる　させる だらう　てせう　らしい　（の）だ　（の）です
尊敬	れ　られ ぬ（ん）　なんだ　ない　なからう（なかった）　まい	れ　られ　ます　たい　た	れる　られる だらう　てせう　らしい　（の）だ　（の）です
指定	だら　でせ う	だっ　でし た	×
希望	（たから）う	（たかっ）た	たい

助動詞の種類／段	將然段	連用段	終止段連體段
尊敬	ませ ぬ（ん）　なんだ	まし た	ます てせう　らしい　（の）です　まい
指定	でせ う	でし た	×

（注意）

○終止段と連體段とは同形であるから、便宜上この二段を一括して掲げた。詳しいことは、一一本文と對照せよ。

第七章　關係詞

第一節　關係詞の意義

『孝は、百行の本である。』

風が吹けば、花が散る。

私にも、それを下さい。

逢ふのは嬉しいが、別れるのは悲しい。

右のは、の、で、が、ば、に、も、をなどは、名詞、代名詞、動詞、形容詞などの間にはさまって、上の語句と下の語句との關係を定める語である。かやうな語を關係詞といふ。

（注意）○關係詞は、又天爾乎波（テニヲハ）助詞などともいふ。

第二節　關係詞の種類及び用法

關係詞には、體言にばかり附くものと、種種の語につくものと、用言にばかり附くものとある。

一、體言に附く關係詞

體言につく關係詞

この類の關係詞は、が、の、に、を、と、へ、

が

の

から、まで、より、で、や、だのなどである。今次にこれらの用法を略説しよう。

が　がは、「花が咲く」、「鳥が啼く」のやうに、主語を示すに用ひる。

（注意）○がは又、體言のやうに用ひられた語句の下にもつく。次の例を見よ。

行きたいなら、行くがよい。　顔は、白いがよい。

その新らしいのが、私の本です。

の　のは、「私の本」、「犬の足」などのやうに、下の體言を所有する意を示すに用ひ、又は「栗毛の馬」、「九州のうまれ」などのやうに、下の體言を限定する意に用ひる。

のは、又、「私の讀んだ本」、「誰れのいった話」などのやうに、文章の主題となる語を示す（句又は節の場合に限る）時にも用ひ、又、「鳥の啼く

に

の（聲）が聞える」「叱られるの（事）がつらい」「安いの（品）を買ふ」のやうに、名詞に代用される。但し、名詞に代用されるときには、いつも用言の連體段の下につく。

に　には「机の上に本がある」のやうに、位置を示す場合「蝌蚪が蛙になる」のやうに、物の歸著することを示す場合「花見に行く」のやうに、動作の標準を示す場合「父に叱られる」、「騎兵に敵を捜索させる」のやうに、受身或は使役の動作をする者を示す場合「ビールに正宗」「鮓に辨當」のやうに、物事を並列する場合「竹に虎」「梅に鶯」のやうに、物事を配合する場合「鳥獸に劣る」のやうに、比較の標準を示す場合などに用ひる。

（注意）○泣くに泣かれぬ」のにのやうに、連體段の動詞について、その下に可能の打消を表はした詞を添へたものや「新聞をお讀みになるのに」のやうに、動詞の連用段にをを冠らせた語の下についたものも、やはり此の類のにである。

を　をは「猫が鼠を追ふ」「子供が紙鳶を揚げる」のやうに、他動の動作を受ける事物を示すに用ひ、又は「鳥が空を飛ぶ」「朝日が山を出る」のやうに、自動の動作の行はれる場所を示すに用ひる。

と　とは「梅と桃」「これとそれとあれ」「善いのと惡いのと」のやうに、物事を並列する場合「これはあれと同じ品である」のやうに、比較の標準を示す場合「父と博覽會へ行く」のやうに「と一緒に」の意を示す場合、「博く愛するを仁といふ」、「これと決めよう」のやうに、物事を受け止める意を示す場

合などに用ひる。

（注意）○受け止めるとは、又名詞として用ひた語や句などにも附く。

次の例を見よ。

これを買ふと決めよう。　まだ夜が明けないと見える。「いそがばまはれ」といふ諺がある。

へ　へは「前へ進め」「後へ下れ」のやうに、動作の方向を示すに用ひる。

（注意）○にとへとは區別して用ひなければならぬ。「東京へ行く」といへば、東京の方へ向って行く意、「東京に著く」といへば、東京の地に到著した意である。へはぼんやりと方向を指し、にははっきりと位置を示す。

から　からは「東京から行く」「二階から目薬」のやうに、動作の起る基點を示すに用ひる。

（注意）○からは文語のよりにあたる。

○からは又名詞として用ひた語の下にもつく。　次の例を見よ。

遠くからでも見える。　宿題をすませてから散歩する。

まで　までは「京都まで歸る」「十時まで勉強する」のやうに、動作の終局する點を示すに用ひる。

（注意）○までは、用言の連體段（實は名詞が省略されてゐるのである）又は名詞として用ひた語の下につくことがある。　次の例を見よ、

日の暮れる（頃）まで仕事をする。　批難されぬ（程度）までに整理した。　女子供にまで笑はれる。

より　よりは「父母の恩は山より高い」「あれはこれより美しい」のやうに、比較の標準を示すに用ひる。

（注意）○比較のよりは、文語も口語も同樣である。

○よりは、又名詞として用ひた語の下につく。　次の例を見よ。

習ふより慣れよ。　死んだよりましだ。

○このよりに、か又は、もなどを添へていふこともある。　次の例を見よ。

氷よりか冷たい。　氷よりは冷たい。　氷よりも冷たい。

で　では、「筆で字を書く」「鉛筆で線をひく」のやうに、下の用言の意味を限定するに用ひる。

（注意）○では、にての約まったもので、にては、に因って、に就いて、に於いてなどの「因って」「就い」「於い」を省略したものである。

○指定の助動詞にも、でがあるし、又他にもで（九十九頁注意の條を見よ。）がある。混同してはならぬ。

や　やは、「桃や、梨を食ふ」、「本や、筆や、墨を買ふ」のやうに、物事を並列する意を示すに用ひる。

（注意）○やは、物事のまだ外にもある意を示す。この點が、ととちがふ。次の例を見よ。

本と筆を買ふ。（本と筆とだけ買って、他には何も買はぬ場合にいふ。）

本や筆を買ふ。（本や筆などを買ふ。他にもまだ何か買ふ場合にいふ。）

○最後の體言の下には、やをつけぬ。

○文語には疑問のやといふがあるが、口語にはない。

○このやと感動詞のやとを混同してはならぬ。

だの　だのは、「犬だの、猫だのを畜ふ」のやうに、物事を並列する意を示す。

だのは、大體やと同じ意味に用ひる。但し、だのはいつでも語ごとにつけて、やのやうに最後のものを省かぬこの點がやとちがふ。

種種の語につく關係詞　此の類の關係詞は、は、（ば）も、でも、さへ、か、ものかこそ、ばかりほど、だけ、なり、やら、などである。今その用法のあらましを次に述べよう。

は　は、「墨は黑く、雪は白い」のやうに物事を區別する意

に用ひ、又「よくは分からん」「容易には出來ん」のやうに、多くの物事の中からある物事を取り出して説明する意に用ひる。

はは、また、「行きは、したが、間に合はなかった」「馬に蹴られは、したが、怪我はしなかった」のやうに、動詞、助動詞の連用段につきさ行三段の動詞につづけて、ある動作を取り出して説明する意に用ひ、或は、「行きは、いったが、間に合はなかった」「蹴られは、蹴られたが、怪我はしなかった」のやうに、動詞、助動詞の連用段につき、同じ動詞を重用して、特にその動作を説明する意に用ひる。但し、この時には、いつも反對の意を有するが、けれども、などの語が下に添はって、事の豫期に反した事を示す。

（注意）○をの下につくは、は「行くをば送り、來るをば迎ふ」のやうにばと濁る。但し通例の場合には、このをを省いて「行くは送り、來るは迎ふ」のやうにいふ。

○このばを、「風が吹けば花が散る」など、本來濁音のばと混同してはならぬ。

もは、「鳥も啼き、蟲も鳴く」、「高くも安くもない」「野にも山にも咲く」のやうに、物事を並列するに用ひる。

もはまた、「讀みも、書きもした」「褒められも、叱られもする」のやうに、動詞、助動詞の連用段につき、下にさ行三段の動詞を續けて、動作を並列するに用ひ、又「知りもせんことを知ったらしいふ」、「讀まれもせん本を買ふ」、「をかしくもないことを笑ふ」のやうに、ある事項の意味を強めていふに用ひる。

その外、もは「食ひも食ったが、飲みも飲んだ、」「叱られも叱られたが、悪い事もした」、「高いも高いが、良いも良い」のやうに、動詞、助動詞の連用段、形容詞の終止段に附き、同じ用言を重用して、動作や有様を勢強くいふにも用ひる。

でも　でもは「一念の力は岩でも透す」、「品は少しでも、情は深い、」「天にでも昇る勢」のやうに、多くの物事の中からある物事を擧げて、その他を類推させる意を示すに用ひる。

でもはまた「君になら言ひでもする、」「馬に蹴られでもして」は馬鹿馬鹿しい」などのやうに、動詞、助動詞の連用段に添うて、さ行三段の動詞につづく。　さうして、ある動作を擧げてその他を類推させる意を示す。

さへ　さへは、「一椀の茶さへ飲まぬ」、「兩親にさへ話さぬ」のやうに、ある事物を擧げて他を類推させる意に用ひ、又は「麵包さへあれば、命は繋げる」、「親にさへ告げればよい」のやうに、ある事物に重きを置いて、その他を顧みぬ意を示すに用ひる。

さへは又、「意味が分りさへすればよい、」「もう庭を掃かせさへすればよい」のやうに、ある動作に重きを置いて、其の他を顧みぬ意を示すに用ひることがある。　但し、この場合には、動詞、助動詞の連用段について、さ行三段の動詞に續ける。

（注意）○「鳥でさへ孝を知って居る」のでさへも、亦さへと同じ意味である。

か　かは、「これかそれかを買はう、」「行くか行かぬかを決めよう」、「何とかかとかいふ」のやうに、ある物事を並列して、其

の中のどれかが不明である意を示すに用ひる。

（注意）○「誰か」讀んでごらん」など、疑の語の下につくかは、多くの物事の中のどれかが不明である意を示すに用ひる。

かは又「まだ風が吹いて居るか」「もう雨は止んだか」「これとそれと、どちらが美しいか」のやうに、動詞、助動詞（指定助動詞だには附かぬ）、形容詞の終止段に附いて、問ひかける意を示すに用ひる。

かは又「こんな小失敗に落膽してよからうか」「私がどうしておまへを遠けようか」のやうに、推量助動詞う、ようの下について、反語を示す。

ものか　ものかは、「あの人が、うそをいふものか」「こんなまづいものが、食べられるものか」のやうに、動詞、助動詞の連體段（但し、過去の助動詞たの下にはつかぬ。）について、反語を示す。

（注意）○ものかは又ものですかともいふ。

こそ　こそは、「あなたこそお仕合せものだ」「ようこそお出で下さいました」、「感心したればこそ、お褒め申すのです」のやうに、意味を強めて物事を言ひ表はすに用ひ、又は「食ひこそするが、まづい」「やめさせこそせんが、信任はしてゐない」のやうに、動詞、助動詞の連用段について、強く動作を言ひ表はすに用ひる。

（注意）○文語では、こそが文の中にあるときには、その末を用言の已然段で結ぶのが規則であるが、口語では、そんな規則はない。

ばかり　ばかりは、「うそばかりいふ」「風が吹くばかりで、雨は降らぬ」「美しいばかりで、外に取り所がない」のやうに、物

事の一つしかないことを示すに用ひる。

（注意）○ばかりは、又ばっかりともいふ。

地方によっては、ばかりを訛ってばかし、ばっかしなどともいふ。併し、これらは正しい語ではない。

ほど　ほどは「日本ほどよい國はない」「勉強すればするほどおもしろい」「人に笑はれるほどつらいことはない」「ひもじいほど苦しいものはない」のやうに、體言又は用言の連體段につづいて、程度を示すに用ひる。

だけ　だけは「今月は五日だけ出勤した」「言へば言ふだけ不利です」「人に笑はれるだけで、何の効もない」、勉強の出來ぬのがつらいだけだ」のやうに、體言又は用言の連體段につづいて、物事の際限を示すに用ひる。

なり　なりは「筆なり墨なり買ふ」「見るなり聞くなりして覺える」「下女になり下男になり聞くがよい」のやうに、體言又は用言の連體段などについて、物事を並列して、その中の一つを選ばせる意を示すに用ひる。

やら　やらは「日曜日やら祭日やらで賑かだ」「飲むやら食ふやら」「嬉しいやら悲しいやら」のように、體言、又は用言の連體段について「あれや、これや」の意を示すに用ひる。

な　なは「泣くな」「人に笑はれるな」のやうに、動詞及び助動詞（受身、使役及び尊敬）の連體段について、禁止の意を示すに用ひる。

用言につく關係詞

用言につく關係詞

この類の關係詞は、ば、と、ながら、たり、

ば

ならば、ものならば、からば、のでば、てば、しばば、てもば、けれどもば、にのにば、ものをば などである。此の類の關係詞は、主に上の文と下の文とを接續するに用ひる。

ばば　ばは、「風が吹けば、花が散らう」、「人に褒められれば、嬉しいでせう」、「うまければ、澤山おあがり下さい」のやうに、動詞、助動詞、形容詞の假定段に附いて、ある事柄を假定する意を示すに用ひる。

ばは又、「學問すればこそ、えらい人になれるのだ」、「良い醫者にかかったればこそ、全快したのです」のやうに、動詞、助動詞の假定段について、ですからの意を強く示すに用ひる。

但し、この場合には、下にこそといふ語を添へる。

ばは又、「本も讀めば、字も書く」、「馬にも蹴られれば、牛にもつ

と

かれる」、「丈も高ければ、肉づきもよい」のやうに、動詞、助動詞、形容詞の假定段に附いて、一つの事柄に他の事柄を取り添へる意を示すに用ひる。

（注意）○このばは、區別のはが音便で濁ったばと混同してはならぬ。

と　とは、「風が吹くと、花が散る」、「人に譏られると、悔しい」、「雨降が長いと、洪水の恐れがある」のやうに、動詞、助動詞、形容詞の終止段について、ある事柄を假定するに用ひる。但し、推量、希望、過去、未來の四つの助動詞には附かぬ。

とは又、「家に歸ると、日が暮れた」、「先生が教室に來られると、すぐ授業が始まった」、「車夫を迎にゆかせると、入り違ひに客が來た」のやうに、動詞又は助動詞（受身、使役、尊敬）の終止段に附いて、或る事柄と他の事柄とが、同時に起る意を示す

に用ひる。

（注意）○このとを體言につくと混同してはならぬ。

ながら　ながらは「景色を見ながらあるく」「斬られながら逃げる」のやうに、動詞、助動詞の連用段に附いて、同時に起る動作を示すに用ひ、又「教育の大切な事を知りながら、教育に盡力せぬ」「毎日人に笑はれながら、一向氣にかけぬ」のやうに、動詞、助動詞の連用段に附いて、上の條件と下の條件との一致せぬことを示すに用ひる。

（注意）○このながらを、接尾語のながらと混同してはならぬ。

たり　たりは「見たり聞いたりする」「褒められたり叱られたりした」のやうに、動作の反復して行はれることを示すに用ひる。但し、此の場合には、動詞、助動詞の連用段について、二つの事柄を竝列し、下をさ行三段活用の動詞につづける。

なら　ならは「書かうと思ふなら、書け」「取られるなら、取って見ろ」「してもよいなら、しよう」のやうに、動詞、助動詞、形容詞の連體段について、ある事柄を假定する意に用ひる。

（注意）○時としては「思ふのなら」「よいのなら」のやうに、「の」を冠らせて用ひることもある。又「思ふならば」のやうに、「ば」を添へていふこともある。

○このならばをなればといふこともある。

○このならは、又「あれならよからう」、「あの人になら話してもよい」のやうに、用言以外の語に附けることもある。

ものなら　ものならは「うたれるものなら、うって見ろ」のやうに、可能の助動詞の連體段について、「されるはずのない動作が、もしされるならば」の意を示すに用ひ、又は「人の

物でも盗まうものなら、どんなに叱られるか知れない」「喧嘩でもしようものなら、すぐまけてしまふ」のやうに、未來の助動詞う、ようの下に附いて、「すべからざることを若したならば」の意を示すに用ひる。

から、ので　からは「僕も行くから、君も行け」「日が暮れたから、戸を閉ぢる」「寒いから、重ね著をする」のやうに、動詞、助動詞、形容詞の終止段に附き、ので は、「毎日雨が降るので困る」、「天氣になったので、外出した」「氣候が順當でないので、病人が多い」のやうに、動詞、助動詞、形容詞の連體段に附く。そして、或事柄が他の事柄の原因となる意を示すに用ひる。

て　ては「風が吹いて、花を散らす」「叱られて泣く」「苦しくてたまらん」のやうに、動詞、助動詞、形容詞の連用段に附いて、

事の由來を示すに用ひ、又「雲が晴れて月が輝く」「この家は廣くて大きい」のやうに、ある事柄に他の事柄を取り添へる意を示すに用ひる。

（注意）○て は完了助動詞の連用段が轉じて關係詞となったのである。
○このて が、四段活用の動詞の連用段（ト）磨ぎ（が行）、死に（な行）、飛び（ば行）、讀み（ま行）などにつづくと、濁ってで となることは、前に動詞の音便のところでいった通りである。

し　しは「學識もあるし、德望もある」「馬には蹴られるし、牛には衝かれるし、ひどい目にあった」「品行も正しいし、學力も高い」のやうに、動詞、助動詞、形容詞の終止段に附いて、ある事柄に他の事柄を取り添へる意を示すに用ひる。

しは　また「土人形ではあるまいし、雨ぐらゐを恐れてはならん」のやうに、打消のまいにつづいて、ある事柄と他の事

が

柄と一致せぬことを示すに用ひる。

が　がは、「雨は降るが、風は吹かぬ」「風は吹かぬが、雨は降る」、「品行はよいが、學力はよくない」のやうに、動詞、助動詞、形容詞の終止段について、ある事柄が他の事柄と一致せぬ意を示すに用ひ、又、「高からうが、安からうが、構はぬ」のやうに、推量の助動詞の終止段について、意味の反對した二つの事柄が、いづれも他の事柄と一致せぬ意を示すに用ひる。がは又、「學オもあるが、德望もある」。「風も吹いたが、雨も降った」、「この山はたいそう高いが、一體、何といふ山だらう」のやうに、動詞、助動詞、形容詞の終止段について、單にある事柄と他の事柄とを接續するに用ひる。

（注意）○このがを主格の體言につくがと混同してはならぬ。

ても

ても　ても は、「問うても言ふまい」、「尋ねられても答へぬ」、「いくら行儀がよくてもだめだ」のやうに、動詞、助動詞、形容詞の連用段について、上下の條件の一致せぬことを示す。

（注意）○このてもが四段活用の動詞の語尾ぎ、び、みの音便い、んの下につくときには、「剝いでも」「死んでも」「飛んでも」「讀んでも」のやうにでもと濁る。これを本來濁音のでもと混同してはならぬ。

も

も は、「家は貧乏でも、慈悲心は深い」のやうに、指定の助動詞の連用段（中止）について、上の條件と下の條件との一致せぬことを示すに用ひる。

（注意）○このもを體言につくもと混同してはならぬ。

けれども

けれども　けれども は、「風は吹くけれども、寒くない」、「梅は咲いたけれども、鶯はまだ來て鳴かぬ」、「行狀は正しくないけれども、學力はある」のやうに、動詞、助動詞、形容詞の終

止段について、上の條件と下の條件との一致せぬことを示すに用ひる。

に、のに　に、のにも亦、「厚著をして居るに(のに)、まだ寒い」「あれほど忠告したに(のに)、まだ改めぬ」「早く改めればよいに(のに)、一向改めない」のやうに、動詞、助動詞、形容詞の終止段について、上下の條件の一致せぬことを示すに用ひる。

（注意）○このにを體言につくにと混同してはならぬ。

ものの　ものを

右の外、ものの、ものをは、

寒いとはいふものの、さすがに春だ。

忠告はしたものの、一向ききめが見えない。

早く來ればよいものを、いつまで待つても來ぬ。

練習

のやうに、用言の連體段について、どちらも上の條件と下の條件との一致せぬことを示すに用ひる。

次の文の中の關係詞を指摘せよ。

1. 僕があれほどにいふのに、少しも聞かないとは、あんまりなことだ。
2. 今日は、雨も降るし、風も吹くから、散歩をやめよう。
3. みめ形がよくても、心ざまが正しくなければ、善い人とはいはれない。
4. 風でもひかせると、どんなにしかられるかわからない。
5. 角力はたびたび見たけれども、芝居は一度もみたことがない

第八章　副詞

第一節　副詞の意義

ゆっくり　あるく。

あの　山は　ずいぶん　高い。

右のゆっくりは動詞あるくに副ひ、ずいぶんは形容詞高

いに副うて、それぞれ、その意味を限定してゐる。かやうに、動詞、形容詞などに副うてその意味を限定する詞を副詞といふ。

第二節　副詞の用法

副詞は、又

たいそう　そろそろ　あるく。

なかなか　りっぱに　出來　た。

のたいそう、なかなかのやうに、他の副詞の意味を限定することがある。又、

いっから　悲しんで　居る　樣子　は　ない。

まことに　申し譯　の　ない　御無沙汰　を　しました。

のいっからまことにのやうに、幾つかの語を隔てて、下の動詞や形容詞の意味を限定することがある。

右の外、副詞は、動詞、形容詞又は副詞の用をする句に副うてその意味を限定することもある。次の例を見よ。

決して　運動に　耽っては　ならぬ。

唯　半日　の　路　だ。

わづかに、一ヤード　の　差　で、白　の　勝利　となった

即ち、決しては動詞の用を爲す句耽ってはならぬの意味を限定し、唯は形容詞の用を爲す句「半日の」の意味を限定し、わづかには副詞の用を爲す句「一ヤードの差で」の意味を限定して居る。

副詞の構成

副詞には本來のものもあり、名詞、形容詞から轉成したものもある。又種種の詞が結び合って出來て居るものもある。今一二の例を次に擧げよう。

今日　行かう　か、いや、明日　ゆかう。

早く　出來　たものは、こはれ　やすい。

大砲　の　音　が、盛んに　聞こえる。

やっとのことで、敵　に　うち勝っ　た。

右の今日、明日は、名詞の副詞に轉じたもの、早くは、形容詞の連用段の副詞に轉じたもの、盛んには、動詞の連用段の名詞に轉じたものに、が加はって、副詞に用ひられたもの、やっとのことでは、副詞やっと、關係詞の、名詞こと、關係詞でが相合して一の副詞となったものである。

練習

（注意）○副詞には、又、ぴかぴか、ざあざあ、ごろごろなどのやうに、語を重ねたものが多い。

次の文の中の副詞を指摘せよ。

1. ぜひ、お目にかかりたいことがありますから、どうぞ、御在宅の日と時間とをお知らせ下さい。
2. 風がざあざあ吹いて、雨がぱらぱら落ちて來たので、群集が、たいそう混雜した。
3. しばらく、お心をおしづめあそばされて、私の申すことをよくお聞き下さい。
4. 先日計畫したことは、おほかた見込通りにいったが、見込の外れたことも、少しあった。
5. 一旦思ひ立ったことは、たとひどんな故障が起っても、決して中途にやめてはならぬ。

第九章　接續詞

第一節　接續詞の意義

筆　または　ペン。

本を　讀み、あるひは　字を　書く。

猫は　鼠を　捕る。それゆゑ、人家に　畜はれる。

右のまたは、あるひは、それゆゑは、語や文などを接續するに用ひる。よってこれを接續詞といふ。

第二節　接續詞の種類及び用法

接續詞には、單に多くのものを累加する場合に用ひるもの、物事を選擇する場合に用ひるもの、上文の事柄と下文の事柄との一致する場合に用ひるもの、及びその相反對

接續詞

事物を累加する場合に用ひる接續詞

する場合に用ひるものなどがある。今その重なるものの用例を次に述べよう。

一、物事を累加する場合に用ひるもの　また、かつ、および、それに、さうしてなどは、これに屬する。次の例を見よ。

また……山　また　山を　越えて　行く。

かつ……本　を　讀み、かつ　字を　書く。

および……米　麥　豆　粟　および　黍　を　五穀といふ。

それに……風　も　吹いた、それに　雨も　降った。

さうして……これ　から　字を　書かう。さうして　先生に　見て　もらはう。

そうすると、そうしたら、

（注意）○このさうしては、約めてそしてともいふ。

二、物事を選擇する場合に用ひるもの　または、あるひは、もしくはなどは、これに屬する。次の例を見よ。

事物を選擇する場合に用ひる接續詞

または……人力車　または　電車　で　いく。

あるひは……學問　あるひは　商業　で　身　を　立て　よう。

もしくは……姉　もしくは　妹　に　話さ　う。

三、上文と下文とが一致する場合に用ひるもの　それで、それゆゑ、それですから、それだから、それでは、それならなどは、この類に屬する。次の例を見よ。

上文と下文とが一致する場合に用ひる接續詞

それで……昨日　雨　が　降っ　た、それで　學校　を　休ん　だ。

（注意）それゆゑ、それですから、それだからは皆それでと同じ意に用ひる。よって、ここにはその用例を省く。

それでのそれを略してといふことがある。又、それですから、それだからのそれを略して、ですからだからといふこともある。

それでは……御不在　です　か、それでは、又　後　日　うかがひ　ませ　う。

（注意）○それならはそれではと同じ意味に用ひる。故にここにはその用例を省く。

○それならはそんならともいふ。又それではのそれを略して、ではといふこともある。

そこで……始業　の　鐘　が　鳴っ　た。そこで　教室　へ　出かけ　た。

（注意）○さうすると、さうしたらなども、亦此の類の接續詞である。

四、上文と下文とが一致せぬ場合に用ひるもの　それで

上文と下文と一致せぬ場合に用ひる接續詞

接續ノ上キニ使用スルニヨリテハ童ノ作文ハ文ガ少ク、シドロモドロノコトヲ作ルコトヲ得、カナガ孫ニカリ四ツノ楷段ニ用ヒラルルニヨリシ事ナリ。

それに。　それに。

それだのに。　それだのに。

すけれども、それですが、それだのに、それでもなどは、皆これに屬する。次の例を見よ。

それですけれども…あの人は道德家です。それですけれども學問はありません。

（注意）○それですが、それだけれどもそれだがなどは、皆それですけれどもと同じ意味に用ひる接續詞である。

○それですけれども、それだけれども、それですが、それだがは、略して、ですけれども、だけれども、ですが、だがなどともいふ。

それだのに…夜が明けた。それだのに、起きようともしない。

○それですのにも、亦それだのにと同じ意味に用ひる接續詞である。

（注意）○それですのに、それだのには、略してそれのに、それにともいふ。

練習

○それでも、しかしなども、亦この類の接續詞である。

次の文の接續詞を指摘せよ。

1. 明日はお伺ひ申します。もっとも、雨天でしたら、缺禮いたします。
2. 私は昨日新橋へいきました。それから、汽車に乘って横濱へ參りました。
3. 今日は雨が降るでせうか、それとも、風が吹くでせうか。
4. 彼れは學識もあり、その上德望もあって、中々當世に得難い人物です。
5. 鳥獸でも恩を知って居る。まして人間たるものが、恩を忘れてよからうか。

第十章　感動詞

第一節　感動詞の意義

ああ、うれしい。

おや、さうでしたかね。（ねい）

どれ（どりゃ）ゆかうよ。

感動詞

右のああ、おや、ね(ねい)どれ(どりゃ)、よなどは、物に感動したとき自然に發する語である。よってこれを感動詞といふ。

第二節　感動詞の種類及び用法

獨立感動詞
附屬感動詞

感動詞には、文の首部につくものと、語句の中や終につくものとある。甲を獨立感動詞といひ、乙を附屬感動詞といふ。

獨立感動詞のおもなるものは、上例のああ、どれ、おやの外に、

あれ　ごらん　なさい。
そら　大變　だ。
やあ　しまった。

練習

やれ　やれ、くたびれた。
まあ、どう　したら　よからう。
もし　もし、あなた　は　どなた　です　か。

のあれ、そら、やあ、やれ、まあ、もしなどである。この他、あら、いえ、いや、えい、おい、これ(こりゃ)、さあ、それ(そりゃ)、はい、はて、ほら、やい、やっなども、亦皆これに屬する。

附屬感動詞のおもなものは、上例のよ、ねの外、

實に　愉快　だ　な(なあ)。
坊　や　ここ　へ　おいで。
來　た　ぞ、來　た　ぞ。

のな(なあ)、や、ぞなどである。

次の文の中の感動詞を指摘せよ。

1. さあさあ、おあがりくださいまし。
2. 元日や、きのふの鬼が禮にくる。
3. この後は、一層勉強しなくてはいかんぜ。
4. それは勿論のことさ。
5. さてさて、けなげな振舞だなあ。
6. おおい、船頭さん、やあい。
7. あら、とんでもない事をおっしゃるは。

第十一章　語の構成

単純な語が、二つ以上集まって、更に一語を作ることを語の構成といふ。

語の構成法に、**疊語法**、**熟語法**、**接頭語法**、及び**接尾語法**の四通りある。今次にこれを述べよう。

第一節　疊語法

木木の梢に、色色の花が咲く。
われわれは、日本帝國の臣民だ。
女女しい振舞や、輕輕しい振舞をしてはならぬ。
ゆめゆめ、此のことを忘れるな。
おやおや、驚いたね。

右の木木、色色、われわれ、ゆめゆめ、おやおやは、同じ語が重なって一語となったもので、女女しい、輕輕しいは、同じ語が重なって、これに形容詞の語尾が添うて一語となったものである。かやうな語を疊語といひ、かやうな語の構成法を**疊語法**といふ。

疊語には、名詞、代名詞、形容詞、副詞及び感動詞の五通りあ

る。前例の木木、色色を始め、山山、川川などは疊語の名詞、われわれを始め、だれだれ、どれどれなどは疊語の代名詞、女女しい、輕輕しいを始め、雄雄しい、なれなれしい、重重しい、うやうやしいなどは疊語の形容詞、ゆめゆめを始め、時時、ロロに、一人一人、見る見る、おひおひに、はやばや、しみじみと、なほなほ、はるばるなどは疊語の副詞、おやおやを始め、あれあれ、まあまあなどは疊語の感動詞である。

第二節　熟語法

秋風が、身にしむ。

朝起は、一家の榮えるもとである。

あちらこちらの敵の要塞をみなおとしいれた。

薄暗い處に育った草木の葉の色は、青白い。

今更に、昔が思ひ出される。

大粒の雨が、ばらばらと降り出した。

あの人は金滿家である。それだけれども、吝嗇である。

右の秋風、朝起、一家、要塞、あちらこちら、おとしいれ、薄暗い、草木、青白い、今更に、思ひ出さ、大粒、ばらばらと、降り出し、金滿家、それだけれどもは、二つ以上の異なる語が合して一語となってゐる。かやうな語を熟語といひ、かやうな語の構成法を熟語法といふ。

熟語には、名詞、代名詞、動詞、形容詞、副詞、及び接續詞の六通

りある。前例の秋風、朝起、一家、要塞、草木、金滿家を始め、織物、赤子、高笑、足弱、書き取り、善し悪しなどは熟語の名詞、あちらこちらを始め、そこここ、だれそれなどは熟語の代名詞、薄暗い、青白いをはじめ、心易い、恐れ多いなどは熟語の形容詞、今更にをはじめ、朝夕、絶えず、例へばなどは熟語の副詞、それだけれどもを始め、それなら、それだがなどは熟語の接續詞である。

敷語が相合して熟語を作るときは、時としてもとの音を變へることがある。今その大要を次に述べよう。

連濁

一、連濁　連濁とは、熟語となるために、次の語の頭の音の濁ることをいふ。「いしはし（石橋）……いしばし」、「ものがたる（物語）……ものがたる」、「うすくらい（薄暗い）……うすぐらい」などは、皆この例である。

轉音

二、轉音　轉音とは、熟語となるために、上の語の末の音が他の音に轉ずることをいふ。「あめと（雨戸）……あまど」、「くちわ（口輪、轡）……くつわ」などは、皆この例である。

約音

三、約音　約音とは、熟語となるために、二音が約まって一音となることをいふ。「あのかた（彼の方）……あなた」、「さしあげる（さし上げる）……ささげる（捧げる）」などは、皆この例である。

省音

四、省音　省音とは、熟語となるために、ある音が全く失せることをいふ。「かへるて（蛙手）……かへで（楓）」、「ふみばこ（文箱）……ふばこ」などは、皆この例である。

加音

五、加音　加音とは、熟語となるために、ある音の新に加はることをいふ。「やか（八日）……やうか」、「むか（六日）……むいか」な

どは、皆この例である。

第三節　接頭語法

はつ雪が、お庭に積もつた。

敵の兵士が、あちこちにさまよふ。

か弱い人でも、たやすく行ふことが出來る。

右のはつ雪、お庭、さまよふ、か弱い、たやすくなどは、雪、庭、まよふ、弱い、やすくなどいふ語の頭に、ある獨立しない語の添うたものである。この添うて居る語を**接頭語**といひ、かやうな語の構成法を**接頭語法**といふ。まつ白、す肌、きけ酒、うち喜ぶ、もてはやす、け高いなどのまつ、す、き、うち、もて、けなども、亦、皆**接頭語**である。

接頭語

第四節　接尾語法

皆さん、どうか人間らしい人間になりなさい。

重砲は、重さが何斤ぐらゐありますか。

春めいたから、近日、友人を尋ねよう。

右の文例について、皆さん、人間らしい、重さ、何斤ぐらゐ、春めいなどいふ語は、皆、人間、重、何斤、春、などいふ語の末に、ある獨立しない語が添うたものである。この添うて居る語を**接尾語**といひ、かやうな語の構成法を**接尾語法**といふ。あなたがた、おまへたち、子供衆、私ども、かれら、厚み、細め、學者ぶる、黄ばむ、薄らぐ、うれしがる、おこがましいなど

接尾語

のがた、たち、衆、ども、ら、み、め、ぶる、ばむ、らぐ、がる、がましいなども、亦皆**接尾語**である。

次の文の中の單柱を施した語の構成を説明せよ。

1. 犬どもが、兎を高みに追ひ上げた。
2. 子子孫孫の末まで、大君の御恩を忘れてはならん。
3. 惡人には遠ざかり、善人には近づくやうにせねばならん。
4. 昨日、書生連と一緒に家を何町何番地に引き越した。
5. 敷島の大和心とはどんなものかと問ふ人があったなら、私は、朝日に匂ふ山櫻花のやうなものだと答へよう。

次の轉音、約音、連濁、省音を説明せよ。

つまごと（爪琴）　こがらし（木枯）　かなへ（鼎ー金鍋）
あじろ（網代）　くすし（藥師）　たなごころ（掌）

第十二章　品詞の解剖

文又は語句をそれぞれの品詞に分解することを**品詞の解剖**といふ。

品詞の解剖に二種の方法がある。甲はただ品詞の九種を區別する方法で、乙は更にこれを小さく區別する方法である。例へば「花が立派に咲いた」を

花（名）　が（關）　立派に（副）　咲い（動）　た（助）。

のやうに解剖するのは甲の方法で、

花　名詞。普通名詞。
が　關係詞。體言に添ふもの。
立派に　副詞。熟語。
咲い　動詞。か行四段。（咲きの音便）自動詞。連用段。
た　助動詞。過去。終止段。

のやうに細かく解剖するのは、乙の方法である。

次の文を、乙の方法によって解剖せよ。

練習

1. 私は、酒も烟草も、嫌ひです。
2. 昨夜は、五時から十時まで勉強しました。
3. 明日は早く起きよう。そして、復習をしよう。
4. あの人は、惡口をいはれても、少しも怒りません。
5. おや、鐘が鳴って居る。火事は何處だらう。

第二篇　文

第一章　文の成分

文を組み立てて居る語を、その職分の上から見ると、自然に數種にわかれる。これを**文の成分**といふ。今次にこれを説明しよう。

文の成分

主語

説明語

一、主語、説明語　話の題目となる語を**主語**といひ、主語を説明する語を**説明語**といふ。例へば、「花が咲く」「山が高い」の二つの文の中で、咲く、高いは花又は山について説明する語であるから**説明語**、花が山がは話の題目となる語であるから**主語**である。

（注意）文は、少なくとも主語と説明語とを備へて居なければならぬ。

客語

二、客語　動作の目的を示す語を**客語**といふ。例へば、「猫が鼠を捕る」、「農夫が稲を刈る」の文の中で、猫が、農夫がは主語で、捕る、刈るは説明語である。然るに、この捕る、刈るは他動詞であるから、「猫が捕る」「農夫が刈る」だけでは意味が分らない。どうあっても、鼠を、稲をなどいふ語を加へる必要がある。この鼠を、稲をは即ち**客語**である。

補足語

三、補足語　主語、客語又は説明語の外の語で、文意を全うする上に必要な語を**補足語**といふ。例へば、「秀吉が、關白となった、」「頼朝が、義經に逢った」の二つの文の中で、秀

吉が、頼朝はは主語、なった、逢ったは説明語である。しかし「秀吉が、なった」、「頼朝が、逢った」では意味が分らない。必ず、關白と、義經になどの語を加へなければならぬ。然るに、關白、義經は動詞の目的即ち客語ではなくて、説明語なった、逢ったの意味の不十分なところを補ふ語である。故に**補足語**である。又「艱難は、人を玉にする」、「落武者が、芒を人と思ふ」の二つの文の中で、艱難は、落武者がは主語、人を、芒をは客語、する、思ふは説明語である。しかし「艱難は人をする」「落武者が芒を思ふ」といっただけでは、意味が分らない。必ず、玉に、人となどいふ語を加へなければならぬ。然るに、玉に、人とは他動詞の説明語する、思ふの目的即ち客語ではなくて、する、思ふの意味の不十分なところを補ふ語である。故に、これもまた**補足語**である。

（注意）○形容詞又は指定の助動詞を説明語として居る文にも、補足語を要することがある。次の例を見よ。

甲は、乙に等しい。　心は、白絲と同じやうである。

富士川は、急流です。　おれは、おれだ。

○主語は、大むねが、はなどの關係詞に伴なひ、客語は、多くをの關係詞に伴なふ。又、補足語は、多くに又はとの關係詞に伴なふ。但し、主語にでも、さへ、ばかり、こそなどの關係詞がつくこともあり、客語のをが省略されることもある。又、補足語にを、へ、から、より、までなどの關係詞がつくこともある。

四、修飾語　文の意味をくはしくするために、主語、客語、補足語および説明語に附け加へる語をすべて**修飾語**といふ。例へば「白い犬が走る」、「母が泣く兒に乳を呑ませる」、

「春風が櫻の花を散らす」などの文で、白いは主語犬にかかり、泣くは補足語兒にかかり、櫻のは客語花をにかかつて、それぞれ、その意味を限定して居る。故に、いづれも**修飾語**である。

又、「雨が、はげしう降る」、「私は、大層、あの人に敬服して居る」の文の中で、はげしうは、すぐ下の説明語降るにかかり、大層は、補足語を隔てて、説明語敬服して居るにかかつて、その意味を限定して居る。それゆゑ、これらも亦**修飾語**である。

（注意）○主語、客語、補足語の修飾語となるものは、多くは連體段の用言か、體言にのついた句かである。而して、説明語の修飾語となるものは、多くは副詞である。

文の成分は、主語、客語、補足語、説明語、およびそれぞれの修飾語である。而して、それぞれの修飾語を含めて、**主部**、**客部**、**補足部**、**説明部**ともいふ。又、主部に對して、他の三部を總稱して**叙述部**ともいふ。次の表を見よ。

主語の修飾語	主部
客語の修飾語	客部
補足語の修飾語	補足部
説明語の修飾語	説明部
	叙述部

練習

次の文を各成分に分解せよ。

1. 活潑な精神は、健康な身體に宿る。
2. ボートの進水式は、昨日隅田川で行はれた。
3. 教師が、生徒に、算術の宿題を課した。
4. 昨日の運動會は、たいそうおもしろかった。
5. 天照大神は、三種の神器を皇孫瓊瓊杵尊にお授けなされた。

第二章　成分の排列

文の成分の排列には、ほぼ一定の順序がある。次の例を見よ。

成分の排列

風が（主）、吹く（説）。
秀吉が（主）、關白（客）となった（説）。
風が（主）花を（補）散らした（説）。
校長が（主）、優等生（客）に賞品（客）を与へた（説）。
校長が（主）、賞品（説の修）を優等生（補）に与へた（説）。
風が（主）はげしう吹く（説）。
東郷大將（主）は、東洋（補の修）のネルソン（補）とあがめられて居る（説）。
我が（主の修）海軍（主）は、大いに（説の修）露國（客の修）の艦隊（客）を破った（説）。

時や所をいふには主は補足語なり

成分排列の一般順序

即ち

一、主語は主位にある。
二、説明語は末位にある。
三、客語は、主語と説明語の中間にある。
四、補足語は、客語のない文では、主語と説明語の中間にある。客語のある文では、客語の上か下かにある。
五、修飾語は、修飾される語の上に添はる。但し、補足語又は客語のある文では、多く主語のすぐ下に、説明語の修飾語が添はる。

右は、成分排列の一般順序であるが、時として、語調をととのへたり、語勢を強めたりするために、わざとその位置を

成分の顚倒

顚倒させることがある。次の例を見よ。

うまいなあ、君の演説は。

ねるとしよう、もう十時になったから。

困るなあ、毎日天氣がわるくて。

忘れてはならぬぞ、父の遺訓を、くれぐれも。

いきますよ、きっと、雨が降っても。

どこへ、今の鳥は飛んでいったらうか。

成分の省略

第三章　成分の省略

文は、前後の關係や從來の慣用によってその意味の言外に推知される時に限り、その成分を略することがある。次の例を見よ。

（私は）主　明日　君　を　お尋ねしませう。

（あなたは）主　いつ　御出立　に　なりますか。

私　は、少しも（その事を）客　存じませんで

した。

僕　は、言海　を（言海を）客　買った。君　も

買ったらうね。

校長　が、卒業證書　を（卒業生に）補　授與　され

た。

夜　が　明け　ました。さあ、早く（床から）補

お起きなさい。

千里の道も一歩から。（はじまる）說

「君は　いつ（說）上京しましたか。」「僕は

昨日。（上京しました）」

右はいづれも、主語、客語、補足語又は説明語を略いた例である。この外、文には同時に二個以上の成分を略くこともある。次の二つの例を見よ。

「(君は)(人人)いつ　學校を　退學したか」「(僕は)昨日。(學校を)(退學した)」

主　補　客　説

次の文の成分の位置や省略などについて説明せよ。

1. 正直の頭に神宿る。
2. 昔は昔、今は今。
3. よくお出でした。さあさあ、こちらへ。
4. 「いつも失禮ばかり。」「いや、私こそ。」
5. 思ひもよらぬことでした。今日お出で下さらうとは。
6. 「なぜ缺席しましたか。」「頭痛のために。」
7. 明治二十三年十月三十日に、天皇陛下は、教育勅語を下し賜はつた

練習

節

第四章　節

風も吹き、雨も降る。

徳の高い人は、尊敬される。

右の風も吹き、雨も降る、徳の高いは、何れも文の主要成分たる主語、説明語などを備へて居るけれども、文の一部分を形造って居るに過ぎぬ。かやうに、文に必要なる成分を備へながら、なほ文の一部分たるに過ぎぬものを節といふ。

節は其の性質上より次の五つに大別する。

第一節　獨立節

前例の風も吹きと雨も降るとは、いづれも對等の價値を備へて居て、互に他の節に從屬して居ない。かやうな節

獨立節

を各獨立節といふ。

兄は本を讀み、弟は字を書く。

の兄は本を讀みと弟は字を書くとの如きも、亦各獨立節である。

第二節　名詞節

名詞節

諺に、「時は金だ」といつてある。

弟から、「叔父が死んだ」と知らせて來た。

右の時は金だ、叔父が死んだは、いづれも體言のやうに用ひられて居る。かやうな節を名詞節といふ。

第三節　形容節

徳の高い人は、尊敬される。

形容節

學生のボートを漕ぐ樣が、勇ましい。

右の徳の高いは、名詞人を形容し、學生のボートを漕ぐは、名詞樣を形容して居る。かやうな節を形容節といふ。

（注意）その困難は、盲人が杖を失ったの（困難）と同じてある。

花の散るの（樣）は、雪の降るの（樣）に似て居る。

右の盲人が杖を失った、花の散る、雪の降るは、名詞困難、樣などの代用たる關係詞のを受けて居るから、直接に困難又は樣を形容して居るものと見てよい。

第四節　副詞節

雨が止んだら、散歩しよう。

容貌は醜いけれども、心は美しい。

右の雨が止んだら、容貌は醜いけれども、いづれも他の動詞、形容詞などを限定して、副詞の用をつとめて居る。

副詞節

かやうな節を**副詞節**といふ。

第五節　説明語節

説明語節

仁者(主)は、命(主)が(説)長い(説)。

太郎(主)は、畫(主)が(説)上手(説)だ。

右の命が長い、畫が上手だは、何れも説明語の用をつとめて居る。かやうな節を**説明語節**といふ。

（注意）この場合には、仁者は、太郎はを、又**總主**ともいふ。

附屬節

名詞節、形容節、副詞節、説明語節を、獨立節に對して**附屬節**と總稱する。

練習

次の文の中の節を指摘し、且つこれを分類せよ。

1. 塵も積もれば山となる。
2. 花は咲き、鳥は啼く。
3. 日本人は、愛國心が強い。
4. 己れの欲せぬことを、他人に仕向けてはならぬ。
5. 古人も、「正直の頭に神宿る」といって居る。
6. 日の暮れぬうちに、宿に著きたいものだ。
7. 大水が出れば、堤がくづれ、大風が吹けば、家がたふれる。

第五章　文の種類

文をその組織上より大別すれば、三類となる。今次にこれを述べよう。

第一節　單文

日(主)が　暮れ(説)た。

子供(主)が　本(客)を　讀んで(説)　居る。

母(主)が　子供(補)に　柿(客)を　やった(説)。

右の文は、一箇の主語、客語、補足語、説明語を備へて居るば

單文

かりて、節を含んで居ない。かやうな文を**單文**といふ。

（**注意**）雨も（主）、風も（主）、やんだ。

私は、筆（客）と、墨（客）と、紙（客）とを買った。

彼れの學識は、甲にも（補）、乙にも（補）、丙にも（補）劣って居る。

あの男は、高く（客の修）、清く（客の修）、正しい（客の修）心をもって居る。

右は、何れも、二個以上の主語、客語、補足語、又は修飾語を備へて居る。けれども、節を含んで居ない。故に又**單文**である。

○「日本人は、忠義心が深い」（説明語節）のやうに、説明語節を備へて居る文章は、通常、單文の中に加へる。

第二節　複文

諺にも「善は急げ」（名詞節）といふてはないか。

風の吹く（形容節）日は、さわがしい。

複文

重文

雨が（副詞節）やんだら、遠足に出かけよう。

右の文は名詞節、形容節若しくは副詞節を含んで居る。かやうな文を**複文**といふ。

第三節　重文

鳥は（獨立節）歌ひ、蝶は（獨立節）舞ふ。

弟は（獨立節）兄を敬ひ、兄は（獨立節）弟を愛する。

右はいづれも獨立節から成りたって居る。かやうな文を**重文**といふ。

文は以上三種に外ならぬけれども、中には隨分込み入ったものもある。今その一例を次に述べよう。

山は（副詞節）高い（複文）けれども、限りがあり、

練習

海は深い（副詞節）けれども、底がある。（複文）

右は複文二個より成り立ってゐる重文である。（重文）

雨も止み、（獨立節）風も靜まって、（獨立節）おだやかな空模様となった。

右は重文を含んでゐる複文である。

次の文を分類し、且つその中に含んでゐる節を説明せよ。

1. 吉野山は花によく、龍田川は紅葉によい。
2. 太郎の進軍喇叭を吹く聲が、かすかに聞こえた。
3. 虎は死んで皮を殘し、人は死んで名を殘す。
4. 角力はたびたび見たけれども、芝居は一度も見たことがない。
5. 行の正しい人は尊敬されるし、行の正しくない人は擯斥される。

日本語法提要　終

明治四十年八月七日印刷
明治四十年八月十日發行
明治四十年十二月二十日訂正再版印刷
明治四十年十二月廿五日訂正再版發行
明治四十一年二月十三日訂正三版印刷
明治四十一年二月十六日訂正三版發行
明治四十二年十二月十日訂正四版印刷
明治四十二年十二月十五日訂正四版發行

（日本語法提要奥附）
定價金卅錢

著者　小山左文二　東京市京橋區南鍛冶町一番地
發行兼印刷者　松邑孫吉
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍
發行所　東京市京橋區南鍛冶町振替口座七九三四番　松邑三松堂

不許複製